
美しい月の夜に....。

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい月の夜に…。

【Nコード】

N6329Y

【作者名】

いちご

【あらすじ】

「綺麗な月ね…。」

——人間界と地上界。

地上界の天才月騎士^{ムーンナイト}と呼ばれる美月^{みつき}は、人間ではなかった。

地上界に生まれる月騎士は、人間の人生を決める重要な存在だった。

心を闇に封印された美月の前に、次々と敵が現れる。

——遠い昔、人と人の間に生まれた憎しみ。

生まれてきた意味を探して、最期に美月が選んだ答えとは…？

人間界の夜

——美しい月の夜。

街は暗闇に包まれ、人間達の気配は、段々と消えていく…。

そんな人間界を、高い塔の上から見下ろす一人の美しい少女がいた。

彼女の名前は、かざまい みつき風舞美月。

ブラウンの長く美しい髪を持ち、ゴールドの大きな瞳は、この世界の暗闇を映していた。

「美月、そろそろ地上界に帰ろうよ。」

彼女が座っている隣に、可愛らしい顔の10歳程の少年が不機嫌そうに立っている。

彼の名前は、おに ひかり鬼百輝瞳。

「輝瞳…さっきからそればかりね。うるさいわよ…。今話しかけ

ないでよね。考え事をしているんだから。」

すると、輝瞳と呼ばれる少年は、一つ盛大な溜め息をついて大声でこう言った。

「バカ美月！人間界に行ってるって上層部にバレたらどーするんだよ。僕ら殺されちゃうよ！」

自分の身の危険を感じる輝瞳は、徐々に顔色が悪くなっていく。

「輝瞳。大丈夫よ、安心なさい。私の才能溢れる能力で、地上界の時間を止めてるから。」

ウインクをしながら自慢気に言う美月に、輝瞳は呆れている。

「まったく！今の美月の力じゃ、あの巨大な地上界の時間を止める力はないよ。」

——第一、そんなこと、神様だって出来やしないさ。

「ふん。何よ…、可愛くないわね。そんなにここが嫌なら、貴方一

人で帰ればどう？あたしは、ここに残るわ。」

輝瞳の言葉でますます不機嫌になっていく美月。

「おいおい、変な冗談言うなって。お前、ますます性格悪くなってるよ。」

暫く二人が喧嘩していると…

コツ…コツ…。

「しっ！何か聞こえない？私達以外に誰がいる…。」

規則正しい足音は徐々に近付いてくる。

「駄目だ…。バレたんだよ。もう僕達はお仕舞いだ。」

「バカ！まだわからないじゃない。一応、武器を構えて…。」

二人は身構え、それぞれ手に短剣を握る。

すると、二人の前に黒い渦が現れ、それは人影になっていく。

「はぁ……。お前達、そんな小さな武器でこの俺を殺せると思うか？」

突然現れた彼の名前は、とうまかなた藤真天空。

「天空！！」

「げっ！！」

彼は、スーツを着た、美形の青年である。

「まったく、お前達には呆れるな。輝瞳！美月の監視を任されていたらはずじゃないのか？お前の仕事は何だ？」

「ごめんなさい、天空。…僕も一応止めたんだけど、美月が頑固だから。」

でも、少しでも美月のためになつたらと思つて…。」

天空に怒られて落ち込む輝瞳。

一方で、無関心の美月。

「美月！お前にも怒ってるんだ。人間界に無断で行くことは、禁止されているはずだろう？」

「そうだったわね。でもこれは、仕事の下見よ。どの人間があたしに相応しいか、この目で確かめたくて。」

反省する気がない美月を見て、溜め息をつく天空。

「お前が担当の人間を決めるんじゃないだろ。担当を決めるのは、地上界の上層部だ。」

「うるさいわね。あたしの気も知らないで……！」

あまりにも激しい二人の喧嘩に恐怖を感じた輝瞳。

「おい、二人共！こんな所で喧嘩は止めようよ。こんなことして間に時間が過ぎてくたろ……。」

人間界に行っただけで、死ぬなんて御免だ。」

すると、輝瞳の必死な様子が伝わったのか、二人は一旦、大人しくなった。

「安心しろ。上層部にはうまく誤魔化しておいたから。でも、次にルールを破ったら、命は無いと思え。」

「そっか…ありがとう…。天空は、やっぱりすごいや。」

輝瞳の顔はペアと明るくなり、命の恩人を見るような目で天空を見つめた。

それでも、相変わらずそっぱを向いたままの美月。

「しょうがないな。考え事してたんだろう？そういう時間もあるだもんな。」

そう言って美月の横に座る天空。

「え……。」

天空はニコツと笑う。

「何よ…いきなり。じゃあ、静かにしててよ！」

あ、あたしが立ち上がったら、もう帰るって意味だからね…！」

美月の素直じゃない可愛らしい所に、天空と輝瞳は、内緒で目を見合せ笑っていた。

地上界の屋敷（前書き）

美月^{みつき}達は、冬の人間界から地上界に戻ってきます。

まだ夜が明けていない地上界で、美月と輝瞳^{きらと}は、天空^{かなた}の屋敷にお邪魔します。

地上界の屋敷

——冬の地上界。

人間界と見た目は同じでも、何かが違う気がした。

「お帰りなさいませ、ご主人様。…美月様のお部屋もきちんとして用意いたしております。」

地上界でも有名な豪邸のメイドが出迎えに来た。

「ああ、助かるよ。ちなみに、追加でこの子もいるんだが。」

天空の背中におぶられた輝瞳は、可愛らしい寝顔をしていた。

メイドは、チラッと輝瞳を見て、「かしこまりました。彼のお部屋も只今ご用意いたします。」と無表情に言った。

「結構よ。輝瞳は私の部屋で寝かせるわ。離れたくないもの。」

美月は、不安そうな顔でそんなことを言った。

「了解。……そういうことから、やっぱりいいよ。すまない。」

「かしこまりました。」

動作は、ロボットのように完璧だった。

この屋敷のメイドは、感情というものが無い。

案内された部屋に入ると、美月は、無駄に広い空間が気に入らなかった。

「疲れただろ。明日は学校だから、早く寝た方がいい。輝瞳は、ベッドで寝かせるけど、美月はどうする？」

輝瞳を大きなベッドに寝かせながら尋ねてきた。

「隣に寝るわ。…後は、自分でやるから。」

もう一人にしてほしい、とでも言うように静かに眠りにつく美月。

天空は、しばらくこの部屋でティータイムを楽しんでいた。

すると、小さな寝息が聞こえてきた。

「やっと眠ったか…本当にお前は、いつも俺に心配をかける…。」

美月が眠るベッドに腰をかけ、額に手をかざした。

すると、天空の脳裏に美月の隠された想いが刻まれていく。

天空は、他人の考えたことがわかる能力に優れている。

一人残された美月。

——お母様、お父様。

どうして、私を残して死んじゃったの。

辛い訓練は、もう嫌だ……。

「お前は、地上界でエリートと呼ばれる風舞家に生まれたんだ。

当然、月騎士の訓練を受けなければならない。」

上層部は、そうやっていつもあたしを閉じ込めようとする……。

「あれ、風舞美月じゃない…行こ行こ。怖いよ、あの子。」

——離れていく人。

「風舞家の娘の様子は…?」

「まだ若干の感情が残っているようだ…。早く、感情を忘れさせなければな。ロボットに優しい心など、必要ないだろう。」

「風舞美月は、我々の誇りだ。武器として最強に育った時、地上界は更なる革命を起こすだろう。」

みんなあたしを利用している。

心が壊れてすべてが、思い出さえも無くなってしまふ。

いつか、お母様とお父様も思い出せなくなる。

どんどん感情を忘れていつちゃう。

暗闇の中に、一人だけポツンと立っている悲しい顔をした美月がいた。

「やっぱりな……。」

美月の心を見た天空は、先程の美月の様子が理解出来た。

「可哀想に……。辛いだろ、誰にも言えないで。」

まだほんの少し幼さが残る可愛らしい寝顔を見つめて、溜め息をつく。

「……おい、天空。人の記憶を勝手に見るなって……。」

天空は突然、隣から発せられた声に驚いた。

「輝瞳、起きていたのか。」

彼は、ベッドに横たわりながら二人の様子をじっと見ていたらしい。

「だって、目覚めちゃってさ。ねえねえ、美月はどうだった?」

不安そうな輝瞳。

「どうやら、まだ人間のような心が残っているらしい。」

「え！本当か!?!」

「静かに!」

天空は、大きな声を出した輝瞳の口を塞ぐ。

「美月が起きてしまっただろ?」

すると、輝瞳は小さな声で言った。

「ごめんなさい…でも、嬉しくてつい。もう駄目かと思っていたからさ…。」

悲しそうな顔でベッドから起き上がる輝瞳。

「美月、突然人間界に行きたいって言ったんだ。どんな感情が残っていたの？」

「ああ…苦しいとか辛いとか、悲しいとか、人間でいったらそんな感じかな。」

「やっぱり明るい感情じゃないね…。でも、残っているだけマシだよ。もし、美月が感情を無くしたら、ただの従順ロボットだもんな。」

「だがな…」

天空は、何かに引っ掛かっていた。

「どうしたの…？天空。」

喜んでいた輝瞳に対し、気まずそうにこう言った。

「いや…それが…。美月は、記憶喪失になりかけていたんだ。いつか…いや、もうすぐ心だけでなく、記憶さえも無くなるだろう。」

残っていると言っても、ほんのわずかなものだしな。」

「そんな…それじゃあ美月が…、美月の両親が可哀想だ！二人は、美月のために死んだのに…。」

「二人とも、どうかしたの…？」

輝瞳の声で目を覚ました美月は、二人に視線を向けた。

「ああ、起こしてしまったて悪かったな。もう少し、休んでいていいよ。」

輝瞳は、なんだか美月の顔が見れなくて、うつ向いている。

——美月の顔を見たら泣いちゃうもん。

「輝瞳…どうかしたの？具合でも悪いの…？」

その言葉に輝瞳は驚いて涙が出てしまった。

——美月は、まだ優しい心を無くしてなんかいない！

「なんでもないっ。ちょっと顔を洗ってくるよ。」

そう言って輝瞳は、美月から逃げるように部屋から出ていった。

「何よ、あれ。天空…！もしかしてリクを叱っていたんじゃないでしょうね？」

——あたしが無理やり人間界に連れていったから…。

「そんなわけないだろう。あんな心の優しい子を叱るはずがない。」

あり得ない…とでも言うような表情をした。

「そう。まあ、いいわ。ところで貴方、なぜここに？さっき、出て

いけと言ったわ。」

「嘘をつけ。雰囲気だけ漂わせただけで、言葉にはしていないだろうが。」

言葉にしまぎや、相手に伝わらないこともある。

何か、俺に言いたいことはないの？」

一瞬美月は驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻った。

「いいえ。何もないわ。天空は他人でしょ。あたしのことなんてどうだっていいじゃない！早く、出ていって。」

「わかった。だけど、美月。」

天空は、ベッドに座る美月と視線を同じにして真剣な顔で言った。

「お前のことをどうでもいいと思ったことなんて、一度もない。」

俺にとって、美月と、美月のお母さん、お父さんは大切な人なんだ。

「

予想外の天空の言葉に、どう反応したらいいかわからなかった。

「明日、学園で待つてるよ。今日は、今から仕事で、ここを留守にするから。必要なものがあつたら、さっきのメイドに頼むといい。」

一方的だったけど、美月は、「わかったわ。」とだけ返事をした。

「じゃあ、また明日。まだ夜が明けていないから、寝てるよ。」

そう言つて天空は、手を振りかざし、一瞬で姿を消した。

部屋のドアの隙間から少しだけ見える、小さな人影。

「輝瞳…どうしてそんな所で聞いているの。早くこちらに来たらどう？真冬なんだから、廊下は寒いでしょう。」

「なんだ…バレてたのか。」

輝瞳は、二人が話しているのを廊下でこっそり聞いていた。

「変な子ね…。そう言えば…さっき貴方、なぜ様子がおかしかったの？」

「えっ！別に…なんでもないよ。朝は顔を洗うのは当然だろう。」

——僕、嘘付くの苦手なんだって…。

泣いてた、なんて言えないし。

「あのねえ。今、何時だと思ってる？深夜3時よ。貴方いつも寝坊して、あたしより起きるの遅いじゃない？」

——完全に怪しまれてる。

「目が開いちゃって。本当になんでもないからな。」

「輝瞳も天空も、さっきからなんか変よ。あたしに隠し事はしないって、小さい頃からの約束でしょ？」

「その約束を覚えているなら、そのまま美月に返すよ。」

「どういう意味よ。」

——良かった。まだ美月のままだ。

「美月も隠し事は、ダメってこと。言いたいことは、言わなきゃ。じゃあ、僕も行こうかな。」

「どこへ?。」

「ちょっとね…気分転換にブラブラしてくる。」

「こんな深夜に…?やっぱり変!。」

すでに輝瞳は、支度を済ましていた。

「ねえ、美月。前から言いたかったけど……僕も美月が大切な人だよ。」

ニコツと笑った輝瞳は、そう言い残して、静かに姿を消した。

「はあ……。」

——なんか、よくわからないけど、二人の言葉に安心したあたし。

「なんかもう、眠れないよ……。」

——こうして地上界の夜が明けていった。

神楽学園高等学校（前書き）

藤^{とう}真^ま天^{かな}空^たは、実は学校の先生でした。

夜が明けるまでの天空サイドの様子です。

新たな敵も登場…？

神楽学園高等学校

「藤真先生。最近働きすぎです。深夜の給料は入りませんからね。」

天空は自分の屋敷を出て、美月が通う神楽学園かぐらにいた。

「……明日の授業のプリントを作らなきゃならないので。お気になさらず。」

同僚の言葉に少しムカつきながらも、黙々と仕事をこなしていく。

「それはお疲様ですねえ。そう言えば、あの天才美少女はどうなったんでしょうね？」

「……はい？天才美少女って誰ですか。」

随分いいあだ名だな……しかし、美少女なんてウチの学園にいたっけか。

「なんだ、知らないんですか。貴方が毎回気にしてる、うちの学園の生徒……風舞美月のことですよ。最近、貴方との仲を噂されているようですが。」

同僚の言葉に動揺し、作成中のプリントが破けてしまった。

「うわ…最悪だ。もうすぐで仕上げだったのに……。」

「何か心当たりでも？貴方は教師、彼女は生徒ですが？」

「いや、なんでもありませんって…。第一なんで俺が噂に…？」

——聞かない方が良かったか…？

まさか、さっきまで一緒だったのがバレたのか。

「いえ。貴方は生徒にイケメン先生と言われているので。それと、最近話題の絶えない風舞さんをくっ付けてみただけです。

いわゆる、妬みというやつです。」

——バレてなかったのか…。

驚かせんなよ、ブサイク先生。

「……まあ、あまり彼女を自宅に連れていけないことですね。誰かに見られでもしたら貴方破滅です。」

——って……バレてたのかよ！

「あの、吉崎先生……？」

「さっき見かけたもので。もし貴方が僕を怒らせるようなことがあれば、即ばらしますので。」

「……………」

啞然とする天空。

「あ、……天才美少女って言うのは、一体どうやって付いたんでしようね……。」

——話題変えるしかない……だけどまた美月の話じゃ意味ないだろ俺！

「上層部から噂が伝わってこつちまで来たんです。彼女が月騎士のエリート一家に生まれた血筋ってことが一つ目の理由。もう一つは、僕達が教えるすべての教科がパーフェクトにこなせることが由来だそうで。」

美少女は、ただ単純に見たままと言っていますが。」

——なるほど……。

「しかし、朝方の仮実習は、珍しく失敗したようですが。」

「仮実習か……。」

——上層部。何を考えているんだ。

「地上界上層部がお見えになった時は、驚きました。上層部が授業を見学するなど、異例ですからね。」

「ああ。そして、クローン人間を相手に、上層部は実力を見せつけようとさせていた。」

——その時まで、何も知らなかった。

美月がクローン人間で訓練をさせられていたことに。

「しかし、疑問ですね。僕達の仕事は、人間達の長い人生に関わって運命を導かせること。一日で終わるはずがない。」

「俺もそう思いました。けど、後で上層部に聞いた所、そのクローン人間は、人生が一月で終わるように造られていたそうです。」

随分と、雑なやり方でしょう？

彼らは、風舞の能力を向上させようなんて、本当に思っているのでしょうかね…。」

——1か月前…。

「風舞美月、お前に新たな訓練材料を与える。」

ここは、地上界上層部基地。

地上界の半分を占めると言われ、巨大な敷地を誇る。

「新たな材料……？」

美月の目の前に現れたのは、一人の少女。

「これはクローン人間だ。我々がお前のために造ったものだ。普通の人間と違うのは、寿命が一月ということ。

そして、将来、お前が担当する人間のクローンだ。」

そのクローン人間は、幸せに、何も不自由が無い生活を送ってきた少女だった。

「風舞美月は、僕達の目の前で、そのクローン人間を殺めようとした。未遂で終わってよかったですね。」

「正直ショックでした……クローン人間の寿命があの時ちょうど尽きる頃だったみたいで。」

風舞は最期に首を絞めようとした。」

いくら運命を左右出来る俺達でも、人間を殺めることは、ルール違反だ。

「でも、あんまり手に力が入ってなかったみたいで、大丈夫でした

ね。上層部の一部は、自分達が育てている兵器をお披露する予定だったでしょう。」

「焦っていましたね。」

——美月が首を締めた時、俺は何も言えず、ただ立ち尽くしていた。

無表情で殺そうとする美月に、衝撃を受けたのは事実。

俺は、今まで美月と生きたすべてが壊れてしまうようで怖かった。

本当は、美月と輝瞳が人間界に行くところを見ていたが、あえて止めなかった。

「藤真先生、吉崎先生。夜遅くまでお疲れ様です。お茶を持ってきましたよ。」

天空が悩んでいると、目の前に学園の教師の中でも際立って美しいと評判の若い教師がやって来た。

「わざわざ、ありがとうございます。」

「すみません。」

「ところで藤真先生、今担当している人間の少女はどうなの？」

「

「病気が進行してまして。寿命を延ばすか考え中ってところですかね。」

「さすがは現在ナンバー１の月騎士ですね。寿命を延ばすなんて技術が必要ですもの。」

でも、さぞかしい子なんでしょうね。

月騎士にそこまでさせるなんて。」

——確かに性格は悪くない…。そうだ、いい考えが思いついた。

「風舞美月の担当の人間が決まるのは、いつかわかりますか？」

「ええ。確か…あと一週間後ですよ。」

女教師は、持っていた個人情報資料に目を通して答えた。

彼女は、美月の担任である。

「ちょうどいいかもな……ありがとう。」

——上層部に駆け寄ってみるか。

「藤真先生……今、何を考えているのか、当てて差し上げましょうか。」

女教師は、何故か面白そうにしている。

「風舞美月のことをあまり気になさらない方が宜しいかと。周りの人に誤解されますわ。」

天空が前から美月を気にかけていることは、先生達もよく知っていた。

「生徒が困ってるんです。なるべく気を付けます。」

「ふふっ……では、失礼します。」

「……あの女には、気を付けた方がいいでしょう。」

さっきまで黙って聞いていた吉崎先生が口を挟んだ。

「なぜです？」

「いえ…別に。」

特に聞かなくてもいいと思った天空は、上層部に向かった。

——美月、お前を助ける方法を見つけたかもしれない。

朝日が眩しく地上界を照らし始めていた。

「どうだ……様子は？」

「ええ。万事、うまく行っておりますわ。」

新たな闇がすぐそこまで来ていることなど、天空は知るよしもなかった。

メイドと美月の記憶（前書き）

天空と、輝瞳がいなくなつて、屋敷に残された美月。

それから美月が学園に行く時間までのことです。

メイドが登場します。

彼女の名前は、花蘭。

意外と美人。無表情だけど、結構強い。

メイドと美月の記憶

——まだ夜が明けたばかりの地上界。

美月は、屋敷の屋根の上に座り、街を眺めていた。

「美月様、紅茶をお持ちいたしました。」

その声に振り向くと、さっきのメイドがまた無表情で立っていた。

「どうも……ところで貴女。もう少し、笑顔になれないものかしら？」

首を傾げるメイド。

「それは……ご命令でしょうか？」

——何それ。命令じゃなきゃ、やらないってことね。

「そうよ。貴女は、お客さんにこの屋敷をよく見せなきゃならない仕事があるでしょ。」

メイドが無愛想じゃ、印象が悪くなるって言ってるの！わかった？」

メイドの発言に少々ムカついて、つい怒り口調になってしまった。

「理解しました。では、そうさせていただきます。」

……ニコッ

すぐにメイドは満面の笑みを浮かべ、美月を見ている。

「そうそう。やれば出来るじゃないの。」

美月は、紅茶を飲みながら暫くボォー…としていた。

——そういえば、さっきから物音がしないわね？あのメイドはどこに…？

「うわぁっ！！」

——まだ笑ってたの…！？

メイドは美月のご命令通りにずっと笑みを浮かべ続けていた。

美月が止めない限り、永遠に続きそうだった。

「信じられない！貴女は、本当に命令通りにしか出来ないの…！？」

「はい。以前、ご主人様にも同じ様なことを言われた覚えがあります。」

「はい…？いや、もう笑うのは止めていいわよ。命令よ、命令。」

「かしこまりました。」

——天空様が十五歳になられた頃。

「おい、ちょっといいか？」

「はい。何かご用でございましょうか？」

当時の藤真家は、天空様のお父上である、藤真光夜様とうま こうやが当主でございまして。

「前から言いたかったんだけど、なんであんたはそんなに無表情なんだ？もっ少し笑え。」

「それは……ご命令でしょうか……？」

天空様は、先程の美月様のように非常に不可解な表情をしておりました。

「違う。笑った方があんたのためにも、いいって言ってるんだ。」

「天空。…余計なことを言うな。」

「お父様…。」

私から見てお二人は、考え方も性格も正反対の方でした。

「またお前が下らない発言をすることで、藤真家の名が廃れるだろう?。」

——光夜様は、当時の地上界で有力者と呼ばれる存在でありました。

また、藤真家は、代々地上界上層部に身を置く、エリート一族。

「お父様…貴方の月騎士を育てるための教育方針…どうかと思いますね。」

屋敷の奴らまで、洗脳させてしまう。

俺は、すべてが悪の貴方が嫌いだ。」

「天空、お前はここに生まれるべき子ではなかったのかもしれないな。」

「どういう意味だ。」

「そのままだよ。」

——考え方がまるで違うお二人は、天空様が幼い頃からいつも対立をしておりました。

「何、突っ立っているんだ、お前は。仕事に戻れ。」

「申し訳ございません。失礼致します。」

「天空がそんなことを…。」

「はい。」

「で、貴女は、結局笑えないのね。」

「話には、まだ続きがございます。」

——私が洗濯を終え、仕事が一段落ついたところ。

「あ……………」

ちょうど、廊下で天空様とすれ違ったのです。

「何かご用でございましょうか？」

「紅茶が飲みたい。」

「かしこまりました。」

「それと、もうひとつ命令だ。……カップを追加で。アンタも休憩しよう。」

いつものようにニコツと笑って、おっしゃいました。

「かしこまりました。」

私は、ご命令通りティーカップを二つ用意し、お庭で天空様とお話を致しました。

「この間は悪かったな。父親とはうまくいってなくて。……ってア
ンタに言っても仕方ないか。」

「いいえ。理解しました。」

「アンタは、あの父親をどう思う？」

「光夜様は、私や、私の周りの者に、よく似ております。ですから、
私も光夜様の考え方は納得でございます。」

「……そうか。アンタもあの男に支配されているんだな。」

——私は、その言葉の意味が未だに理解出来ません。

「ですが……一つだけ言えるのは、天空様は、藤真家の誰とも……い
え、地上界で生きる者の誰とも違うということです。」

「なるほど？そういう違いは感じ取れるのか。」

天空様は、探るように私に何度も質問を投げ掛けてきました。

「くそ、なかなか笑わないな、アンタ。」

「一つ、よろしいでしょうか？」

「なんだよ？」

——私から他人に質問するなど、生まれて初めてでした。

ですが、私を一生懸命に笑わせようとする意図を知りたかったので
す。

「私は、笑うことが出来ませんが、人間は笑うと聞いたことがあります。
なぜですか？」

——天空様は、一瞬驚いた顔をなさいましたが、私の質問に丁寧に
教えてくれました。

「人間は、心を持っているからだよ。」

「心……………」

「そう。環境の変化によつて、心が感じとるんだ。楽しい、嬉しいつて。だから、自然と笑える。笑顔は、人を喜ばすことだってできる。」

他にも、色んな心があるんだ。悲しい、悔しい、苦しい……。」

「それ、騒がしくありませんか…？」

天空様は、一瞬話すのをお止めになりました。

「地上界の奴らはその心を持っていない。」

それは、とても悲しいことなんだ。

この地上界に生まれてくると、心を持たないで生まれてくるらしい……俺も詳しくは知らないが。」

「しかし…何かをしても、何も感じる事が無いなんて…生きてる意味なんてあるのかな…。」

ポツリとおっしゃる天空様は、今まで見たことがない顔をしておりました。

「私は、こうして屋敷で働く使命があり、それが生きる意味だと思

っております。

…天空様は、その人間のような心をお持ちなのですね。私が天空様は皆と違つと感じていたのは、それでしたか。」

天空様は、何も語りませんでした。

「今のお顔は、どのような心の表れなのですか？」

「……………。これは、悲しみの顔。花がしぼんで枯れたような感じ……って言ったらわかりやすい？」

「花が枯れると、私は抜いて捨てます。」

「…………。ダメだ……こりゃ。」

「それから、何度も笑う練習を致しましたが、人間のように、うまく笑えませんでした。」

「いや…笑うって、練習して出来るものじゃないのよ。」

呆れたような顔をする美月。

「でも、あたしも貴女と同じ様になるかもしれないわ。」

——走って、走って逃げ続けた。

「お帰り、美月。今日はなかなか早かったな。」

クスクス笑う天空は、屋敷の玄関のドアに寄りかかって、立っていた。

「…お、お帰りって、ここあたしの家じゃないし!」

「でもお前、毎日のようにここに来るだろ?すっかり馴染んじゃってな。そんなに俺が好きか?」

「違うわよ！ただ紅茶が美味しいから！」

——本当は、すごく嬉しかった。

天空がいてくれて……すごく安心して。屋敷に入ったら、天空が敵から守ってくれる気がした。

「おいで、もう用意してあるから。」

その時……

ガオ……グルル……

振り返ると、何匹もの狼が屋敷を囲っていた。

「きゃあー！」

「花蘭^{かしん}！屋敷の者を呼べ！」

天空がメイドに言つと屋敷のすべての使用人達が出てきて、武器を

構えた。

「ククク……藤真家のご子息が、風舞家の娘を隠していたとは……。」

一匹の狼が獲物を見つけたかのように美月に近付いて来る。

天空は、美月を素早く自分の元に隠した。

「いくら上層部であろうとも、ここから先は我が藤真家の領域。入ることは許さない。」

「しかし、風舞美月は、我々の訓練を抜け出してきた。処罰を与えなければならぬ。大人しく、こっちへ来るんだ!!」

「いいか、お前達。絶対に屋敷に入れるな!」

「行け! 殺しても構わない!」

ガオ……………!

「早く、屋敷へ。」

ガンガンと武器を鳴らす音が聞こえる。

——屋敷に入ったあたしは、放心状態だった。

「大丈夫か？」

天空はそんなあたしを不安げに見た。

「あたし…やっぱり戻ろうかな…。」

「どうして？」

「だって！屋敷の人達が危ないよ！それに、天空にも迷惑が…。上層部に殺されちゃうかもしれない！」

うつ向いたあたしに、近寄る天空。

「安心しろ美月。あいつらは絶対死なない。エリート一家の藤真家

が雇っているんだからな。

俺は、大丈夫だ。

……それにお前、抜け出してきて偉いじゃないか。」

「は……？」

予想外の言葉を受け、美月は驚いた。

天空は、美月の頭を撫でてこう言った。

「自分の考えでここに來たんだろ？嫌だっと思ったんだよな。それでいいんだよ。」

「どづいつこと？」

「誰かの命令をただ聞いてるだけじゃなくて、自分で考えて行動すること。人間の人生を動かす俺達には、大切なことだろ？」

それに、お前は元々、誰よりも頑張り屋だから、サボってもサボっ

た分、また頑張るよな？」

「……それに、まだ心が残ってる唯一の証拠だから。」

天空は、悲しそうな顔をしていた。

「天空様、処理が終わりました。」

そこには、花蘭と呼ばれていたメイドが立っていた。

「お疲れ。どうだった？」

「自分達の命を守って逃げていきました。」

「だと思った…。」

「あの、ありがとうございました！」

その後、両親が迎えに来るまで天空と一緒にいた。

「でも、後に天空のお父様から言われたの。

——息子はお前のために、時間があるフリをしているだけだ。毎日毎日、お前に構ってられない程、たくさんの仕事を抱えている。

昨日の事は、どれだけ恥をかかされたか。だから、我が家に近寄るな。………って。」

「そうでしたか。」

「だから、あたしあれからここに来なかったでしょ。」

「はい。」

「貴女のように無感情になる日も遠くないわ。

もうあまり記憶も無いから……。」

「美月様、そろそろ学園へ行く時間でございます。」

辺りはすっかり明るくなっていた。

「そうね。あ、今まで話したことは秘密よ。……命令です。」

「かしこまりました。では、車をご用意致して参ります。」

一人きりになる美月。

——どうか、思い出が消えませんが。

屋根の上に立ち、日に照らされた街を見ながら、そう願ったのだっ
た。

秘密の部屋で（前書き）

朝になった地上界。

天空^{かなた}は、学校が始まる前に、上層部にある提案を持っていきます。

上層部の現リーダー、桐谷^{きりたにかいと}海斗。

神楽学園の怪しい女教師、小夜^{しょうや}さよ。

天空の決断は果たして…。

秘密の部屋で

「…相変わらず、嫌な雰囲気だ。」

ここは地上界上層部が拠点を置く城。

この巨大かつ豪華な建物の中で、上層部の者達は働いている。

城の周りには、警備係の男達が規則正しくロボットのようにならんでいる。

天空は、大きな扉の前にいた。

サッ

「藤真天空様ですね？上層部の方々がお待ちになっております。」

案内係なのか、急に目の前に現れた女。

「ああ……。さすが、上層部。俺が来るのもお見通しか。」

女がパンツと手を鳴らすと、大きな扉が音を立て、開いた。

城に入り、長く細い廊下を通り抜ける。

「これはこれは…。天空様。」

廊下を歩く、すべての者が天空を見て、お辞儀をする。

「こちらでございます。」

数々の部屋の中で、ある部屋に案内された。

「ご苦労様。この間は、104号室だったのに…また変わったんだな。」

「申し訳ございません。殺人未遂があったもので。」

どうやら今回は、上層部の秘密の部屋を知られてしまったようです。

「

「外部に秘密の部屋の場所が漏れるなんて有り得るのか？」

上層部の者は、地位や名誉、富、すべてを持ち合わせている。

一般人にしてみれば、羨ましい限りなのだろう。

過去に妬みから、殺された者がいた。

その頃から、上層部の部屋は秘密として、関係者以外は入れない仕組みにしていた。

「セキュリティは万全でした。内部の者の犯行とみて調査中です。」

——内部…ねえ。

「そうか…。もう戻っていいぞ。」

「では、失礼致します。」

女は一瞬で消えた。

何号室か書いていない部屋。

天空は、ゆっくりその部屋に入った。

「あつー！天空君。久しぶり〜。」

目の前に現れたのは、優雅に椅子に腰かける男。

書斎には驚が一匹、見張りなのだろうか。

男の隣には、眼鏡を掛けた暗そうな女秘書が立っている。

「お久しぶりです。今日は頼みがあって、ここに来ました。」

「へえ…。君の言いたいことは、よくわかっているよ。まあ、座って座って〜。」

——コイツ、いつも変なしゃべり方だな。

「いえ。時間が無いので、ここで結構です。」

「そう。あっ、天空君は、神楽学園の先生だったよね？君のお父さんと同じだ。」

——男の名前は、きりたにかいと桐谷海斗。

俺の父の友人で、かつては地上界のトップ3に君臨した男だ。

——時間が無いって言うてるだろ。

「そんなこと、どうだっていいんです。」

「君をずっと見ていると、光夜君を思い出すんだよね。」

天空は何も言わず、桐谷を睨んだ。

「僕が上層部のトップになったこと、お祝いしてくれないの？」

「おめでとついでいます。」

無表情で言う天空。

「ハハッ。まあ、いいよ。」

君が言いたいことは、風舞美月のことだろう？いいよいよお。認めてあげても。」

「また勝手に俺の考えを読んだんですね。」

「うん。この能力は便利だよ。」

——プライバシーだろ！

「プライバシーだろ。ククッ。」

「……………」

「ククッ…ごめんごめん。もう使わないよっ。」

要は、自分は月騎士を引退するから、君の担当している人間を途中から彼女に託したいと？」

「ええ…。その通りです。今担当している人間を最後に…。」

「驚いたな…。まだ若いのに引退だなんてえ。どうして…?」

「人間を担当しては、十分にやりたいことが出来ないと思いついて。」

「ふうん。でも、どうして風舞美月に？」

桐谷は興味深そうに天空を見た。

「…風舞美月は、俺の生徒です。最近、彼女は成績が良くない。一週間後に実戦では、失敗する可能性が高い。」

今担当している人間は、俺がすべて把握しています。ですから、風舞美月に任せ、例えば失敗しそうになっても、適切なアドバイスが出来る。そう思いました。」

「成る程ねえ…。だけど、天空君って、随分と彼女を特別扱いしているよね。」

「……………」

「実戦は、彼女だけじゃない。周りのお友達もそろそろ実戦の時期。風舞美月だけというのはどうかな？」

天空はフフツと笑った。

「優秀だった者が急に落ちぶれると、教師は戸惑うものなんです。」

「ククツ。僕は教師じゃないからわからないけど…まあ、いいよ。」

「ありがとうございます。」

——良かった…。

「ただし。一つだけ条件があるよ。」

桐谷は、急に真剣になった。

——それから数分後

「でえ？君はいつ引退しよう？」

天空は腕まで捲られたシャツを下げた。

「彼女にバトンタッチした時に。」

「そ。了解。さーちゃん！これ、よろしく。」

そう言つて秘書に契約書を渡す桐谷。

「では、失礼します。」

天空は早く帰りたいと思っていた。

「あ！待つて。忠告があるよあ。」

——なんだよ。

「君が月騎士を辞めたと正式に認められたら、もう人間界は立ち入り禁止だよ。」

「え……？」

「わかるよね……？地上界の者は、理由なく人間界をうろついてはいけないルールがあるでしょ？」

「ああ。……わかりました。」

「じゃあね。天・空・君。」

ギギー……ボタン。

「疲れた……。これでいいんだよな。」

バサッバサッ

鷺が羽を広げ、桐谷の肩に乗った。

「ふふっ…。酷いのねえ。桐谷さん。」

秘書は、黒い渦を巻いている。

「君もおんなじ。さーよちゃん。」

現れたのは、神楽学園の女教師…

「楽しみね。あの先生が堕ちていく所を見るの。」

「ああ。ゆっくりと苦しみを堪能するといい。」

「やば…授業だ。」

——美月、お前なら大丈夫さ。

「約束守れなくてごめん。」

——隠し事は無しだよっ！

——約束。指切りしよう。

——うん！約束ね！天空。

腕に刻まれた契約印を押さえながら、天空は城を後にした。

人間学の授業（前書き）

天空^{かなた}が、上層部の城から学園に戻ってきます。

美月^{みつき}は、大人しく授業を受けています。

天空が教える人間学。

心を持たない彼らに伝わるのか。

人間学の授業

「はあ。疲れたわ…。」

——神楽学園高等学校。

ここは、月騎士になるために、人間のことを学ぶ学校である。

今、ちょうど三限目が終わった。

「次は、天空の授業ね…。」

昨夜、屋敷で言われたことを思い出すと、なんだか恥ずかしい。

月騎士は、人間の人生に関わる仕事をしている。

人間に技術、知識、奇跡、絶望を与える。

もちろん、与え方は、その人間によって違う。

与えられた運命を考えて、どう行動するかは人間次第。

月騎士は、同情、優しさで運命を与えてることは、まず有り得ない。

人によって魂の器量分は違うらしい。

人間が死を迎えた時、私達は一旦、魂を地上界の審判にかける。

この審判で見るのは、その人が、魂の器量分をしつかり生きたか、ということである。

もし、魂が満足していなければ、その人間の担当者、つまり月騎士の力不足ということ。

満足な魂を続々と生み出し、優秀な月騎士と認められているのは、あの天空だ。

「すごいよね…天空。」

美月には、友達と呼べる存在がない。

人間で言う“クラスメイト”は、全員無言、無表情で座っている。

人間界の学校は、もっと騒がしいものだど、両親から教わったことがある。

「はあ…一度、行ってみたいものね。」

四限目を告げるチャイムが鳴り、それと同時に藤真先生が入ってくる。

——天空…。

「授業を始めるぞ。」

先生が指を鳴らすと、四体のモンスターが現れた。

「うわ…。」

——いつ見ても、好きになれないわ。

モンスターは、足が四本あり、目が純血している。天空曰く、鳥類

らしい。

強いて言えば、人間界でいう…鷺という鳥に似ているだろうか。

モンスターは、教室の上を浮遊し、生徒を監視している。

すると、一体のモンスターが、天空のいる教卓にとまった。

グルル…………。

「よし。欠席はいないようだな。」

いつも、このモンスターが出席を数えているのだ。

天空は、人間学という科目を教えている。

「では、教科書121ページを開いて。」

生徒は、迷いもなく一斉にバツと教科書を開く。

「今日は、人間の“運命”について勉強する。」

——“人間学”

人間と私達…どう違うのかしら。

「人間の人生は、一定ではない。毎日転機がある。些細な出来事も、変化の一つであり、それに対し、人間も向き合い、変化するのが基本。」

天空が教科書を読み上げた。

続いて、黒板に綺麗な字で書いていく。

「人生は上昇すれば、下降もすることを頭に入れておくこと。人間は俺達が作り出す、運命の変化から逃れることは不可能だ。」

でも、結局、与えられた運命を元にどうするかは、人間が決めることだ。」

——うんうん。でも、結局辛い運命を避けることしか考えていなくて、努力もしない人間も沢山いるのよね、きっと。

美月の両親が月騎士であることから、風舞家は、人間の話題が尽きなかった。

「しかし…運命を作り出す事は、容易じゃない。」

天空は生徒の方を振り返った。

「元々の人生のベースは誰にでもあるんだ。

だけど、そのベースに様々な運命をうまく作ってあげて、人生を豊かにさせてやるのが俺達の仕事。その人間に合わせて考えるのは、非常に難しい。」

「それは、なぜですか？」

一人の生徒が質問した。

「担当する人間の性質をすべて把握し、そこに誤りがあつてはならないからだ。」

誤りがあれば、その人間の魂が望んでいることと違ったことをしてしまう。

運命を背負うことは、命を背負うのと一緒になんだ。」

「重そうですね。」

「重いよ。でも、この仕事をしていると、いいことも沢山ある。」

「何ですか？」

「それは、仕事をしてのお楽しみだ。」

——天空の目、なんだか輝いてる気がする。

「先生は、こう思うんだ。」

あたしを見つめる真剣な顔。

「運命をどのように乗り越えていくか…それは、人間の人生の課題なんだろうなって。」

——人生……。

「実は、俺は人間を担当する時、いつもやってることがあってね。」

「例えば、苦しい運命を作り出した後に、その運命から逃げださな
いたための方法を作り出してあげるんだ。」

絶望を感じただけで、その人間が何も学んでいなかったら、立ち上
がれるきっかけを与えてやる。

ただ…気付くか、気付かないかはソイツ次第だな。」

ここで、一人の生徒が手を挙げて質問をした。

「それでも、人間が諦めたらどうすればいいんですか？」

「俺達の力不足だ。」

「不慮の事故などは、どうなんですか？」

「うん。先程言ったが、運命のベースは必ずあるんだ。それは、俺

達にも変えられない。

まあ、回避させることは出来るが、うまくいくか…。

担当者は、その時が来るまで、人間が悔いのないように生きる運命を作ったんじゃないかな。」

———なんだか、複雑な気持ち。

って、あれ？天空がいない。

「風舞。お前だけだ、ノートを取っていないのは。」

「うわっ！！」

天空の話に夢中でモンスターが机にとまっていることに気付かなかった。

バサッバサッ

モンスターの大きな翼で頭を叩かれる。

「きゃあ！止めてっ…。ごめんなさいっ。」

「そこまで。もういいぞ。」

天空の言葉を聞いたモンスターは、叩くのを止めて、また空中に舞い上がった。

美月は、天空をキッと睨む。

——なによ。最悪。

すると隣のクラスメイトが天空に言った。

「先生。この間の風舞さんのように、私達が人間を殺めてしまっこともあるんですか？」

一瞬、時が止まったかのように教室は、静まり返った。

「……………！！」

美月は黙ったまま、俯いてる。

ガタッ

「おい、風舞！」

美月は席を立ち、走ってその場からいなくなってしまった。

——あたしはどうすればいいの。

——やはり、この子達には感情がない。

天空は、思った。

ただの人形のように、冷酷で残虐だ。

終わりを告げるチャイムに、機械的に教科書やノートをしまう生徒達。

質問をした本人も教科書をしまっていた。

「ちょっといいか。質問した君。ちょっとおいで。」

——たく。しょうがないな。

美月を捕まえる前に、この子をなんとかしなければ…。

「お前なあ…あれは友達に言う言葉じゃないよな？」

何かを言ったところでわかるはずがないか…。

なぜなら彼らは心を持っていないのだから。

天空は、美月の気持ちを考えると、胸が痛くなったのだった。

死の番人（前書き）

屋敷を出てから、輝瞳きらとは天国に行きます。

死の番人が登場。

彼の名前は、黒川友吉くろかわともき。

黒川を見守っていた心優しい月騎士のことが書いてあります。

死の番人

——隠者様。天国への道はこちらですか？

「名はなんという…？」

——鬼百輝瞳。

「こちらへ来るんじゃない？」

暗い暗い闇の中、見えたのは一つの灯。

ゆっくりゆっくり進んでいく。

怖さなんかより、早く二人に逢いたかった。

「隠者様…！」

ようやく灯の近くまで行くと、黒いマントを羽織る一人の老人が立っていた。

「おやおや、こんな小さな体で…よくここまで参りましたな。

生きている人間がこの死の世界へ来たのは、珍しいことじゃ。」

「へへっ。って、あれ…？おじいさんは誰…？確か、前に来た時は、違う人だったよ。」

「ああ…それは、先代のことですな。彼は、昨日、死の番人から解放されたのでございます。」

老人は、とても穏やかな顔で言った。

「先代ってことは、おじいさんのお父さんだったの！？」

そう輝瞳が尋ねると、老人は、首を横に振った。

「我々は他人。交代で担当を行っているのです。」

…さあさあ、ご案内致しましょう。」

“隠者”であるこの老人は、“死の番人”とも呼ばれている。

死の世界で、死者の魂を管理する役目を担っている。

また、輝瞳のように時々、生きている人間が来訪することもあるの
で、天国や地獄を案内する役目もある。

「ふうん…。ところで隠者様、前から気になっていたことがあるん
だけどさ…なんで死の番人なんてやってるの？」

輝瞳は、暗い道を歩きながら尋ねた。

「ふふっ…。話が長くなりますが、よろしいかな？」

「うんっ！いいよ！」

「私は、人間として死ぬ前、とても罪深いことをしてしまったので
す。」

——とあるビルの屋上…

「もう、どうしようもないんだ…。」

微かに風が吹き、男は、生きる希望を無くしていた。

「大丈夫か。おじさん？」

優しく、労るような声…。

「だっ…誰だ！？どこにいる！」

——姿は見えないが、あの時、はっきりと男の声が聞こえたんじゃ。

「こうなったら、もう俺にはどうしようもないか…」

おじさん。もう一回、人生をやり直してみないか？」

「何をバカな…！クソッ。みんな俺をバカにしやがって…。生きてても、いいことなんてないんだよ！」

返事は無かった…。

「空耳か…。ハハツ…だよなあ。人生やり直す、なんて。俺は、一体何を考えてんだか。」

手には、可愛い息子の写真。

この手で、確かに、大事に育ててきた…俺の生きた証。

「お父さん、もう疲れちゃったよ。お前がいなくなって、生きる意味が無くなるなんて…。」

天国は、楽しいか？

でも、お前のことだから…もう友達は出来てるか。あ、お母さんもあるもんな。」

人懐っこい息子…太陽のような真っ直ぐで、明るい我が子。

「多分、俺は、お前のいる天国には行けないよ。だけど……。」

——もう、未練は無かった。

息子の写真をコートのポケットに、そつとしまい……

そのまま暗闇の中に飛び降りた。

——ふと気付いた時には、私は、真つ暗闇にいたんじや。

ここは、地獄か…。

「いや…ここは死の世界の入り口だ。」

この声は…やはりさっきのは、空耳ではなかった。

「死の世界……そうか。そうか…。俺は死ねたのか。」

「ああ…。おじさん、今から言うことをよく聞けよ。」

そうして、顔も分からぬ男の話を聞くことになった。

——死の世界には2つある。

ここを左に行くと、天国。

右に行くと、地獄。

そして、この世は、3つの世界に分かれている。

人間界、地上界、そして、おじさんが今から行く死の世界。

おじさんは、まだ人生が全う出来ていなかったから、地獄行きになったがな。

「ああ、わかっているよ。」

悪いな。審判では、俺がおじさんの私情を訴えたんだが、やはり自ら命を犠牲にしたことで、罪人として扱われた。

「審判……。地獄は、恐ろしいものかい？」

——そうだな……。それは、行ってから、自分で感じることさ。

おじさんの魂は、審判にかけられた時には、やはり輝きを失っていて、もう魂が使いものにならなかったんだ。

「魂とは、元は輝いているものなのか？」

——そう。どの魂も、とても美しくて、輝きに満ちている。だから、今から磨きに行くんだ。

「…どういうことだ？」

——地獄とは、魂を復活させる場所なんだ。

だが、輝きを取り戻すには、かなりの時間、忍耐力、意志の強さが必要だな。

「そうしたら、結果はどうなるんだ？」

——もし、努力が認められて、魂が復活出来ると審判で見込まれたら、地獄から脱出出来る。

そして、また一から人間に生まれ変わるんだ。

「さ、ここが地獄。……ここでお別れだ。
アンタなら、絶対生まれ変われるさ。」

なんせ、俺の親友が大事に見守ってきた人間なんだから……。」

「え……？」

俺は、何かに暖かく包まれている感じがした。

大きな漆黒の扉。

「待ってくれ。君は、どこの世界の人なんだい？」

——地上界さ。頑張れ、黒川友吉さん。
くろかわともき

「その声は、そこで途切れた。私は、決心をしたんじゃない。」

——息子を殺された悲しみから死んだ。だが、息子が天国にいることを信じ、前へ進んでみよう。

「漆黒の扉は、やけに重たく感じた。後から、聞かされたことじゃが……扉が重いと感ずる程、背負う罪も重いのだと。」

「そうだったのか……。で、隠者様は、その後どうしたの？」

「私は懸命に働いた。朝、昼、晩と、次期に生まれ変わる人間の準備を手伝っていたんじゃ。」

——次々に検査にやってくる魂。欠陥がないかを確認め、汚れていないかチェックする。

時々、羨ましくも思った。これから新たに生まれるこの人間達は、幸せだと。

「その仕事の最中、私が必ずやることはありませんな。」

「へえ。どんなこと？」

輝瞳は、真剣な眼差しで、隠者を見つめた。

「幸せなれ、人生を楽しんでこいと願いをこめ、優しく包んであげるんじやよ。」

それから、人間界に送ってあげるんじや。」

隠者は、優しく微笑んでいた。

「なんだか、隠者様、好きになつてきちゃった。」

でも、辛いこと——っぱいあつたでしょ？」

「もちろんじや。山ほど。」

——「黒川！まだ仕事があるだろう？これじゃあ、いつまでたつても生まれ変われないぞ！」

“もう、嫌だ……。綺麗な魂なんて見たくない。”

叱られる日々……黙々とこなす仕事。

「じゃが、私は先程、その地獄から這い上がり、死の番人に就くことが出来た。」

「次のステップは、死の番人なんだね。」

「そうじゃ。死の番人の役目を終えた後、やっと人間として生まれ変われるんじゃ。」

「やったー！嬉しいよ、僕も。」

「じゃが、私がここまでやってこれたのも、あの声の男の存在があったからかもしれん。」

——“そう言えば、黒川さん。あなたの人間時代、地上界の担当者2人いたんですってね。珍しいわね。”

地獄資料係が話し掛けてきた。

“へえ。一人じゃなかったのかい。”

“あら。ご存知無かったの？一人は、貴方の絶望を変えようとして、失敗したらしく、亡くなってしまったそうよ。”

“失敗した……？”

“息子さんを殺めた犯人が近くにいたらしくて……貴方から遠ざけようとしたらしいの。だけど、犯人側にも担当者がついているわけですよ。そこで、月騎士同士の争いが起こったそうよ。”

——「おい。邪魔だ、どけ。」

「黒川は、心を痛めているんだ。」

人間は大切にしていたものを奪われると、悲しみが耐えられなくなるって、アンタだって理解しているだろ。

彼は、自分を犠牲にするような優しい性質を持っているんだ。

でも、もしかしたら君が担当している人間が、黒川に殺されるかもしれないんだぞ。」

「ああ。それがどうした？誰があんな雑魚に殺られるかよ。」

貴様も、あの人間も臆病だな。

お前、嫌なんだろう？自分の人間が自殺者が殺人犯になるのがな！」

——違う。ただ、黒川を守りたいんだ。

「君の人間は、最低だと思っていたが、やはり担当者の責任もあるな。」

「ククツ…貴様、人のこと言えんのかあ？…貴様らも、弱い者同士じゃないか。」

そして…月騎士の失格。感情というものがあるなんて。

…だが、面白い。貴様の担当する人間から遠ざけてやってもいいぜ。但し、条件がある。」

——月が不気味な夜。

「最悪だよ。会社クビかよ…。リ・ス・ト・ラ？この俺が？ハハツ…。」

酒に酔っていた犯人の男の前に、目の前姿を現した青年。

「誰だ、テメエ。」

「もう、自首してください。このままでは、貴方の魂が危ないんです…。」

「なんだよ、知ってんのか…俺が黒川さんちの息子を殺めたって…？」

カラン…

ニヤリと笑った犯人の目の前に、なんとナイフが落ちてきた。

——ナイフ！？

「ラッキー！こんなところにナイフ！」

まさか！！

すると犯人の後ろから、さっきの月騎士が現れた。

“この愚か者め。天才と名高いこの俺様がお前のようなクズの提案を受け入れるとも思ったか。”

——
“条件？”

——
“ああ。貴様が直接言ってくれよ。もうやめて下さいって。いちいち俺が運命変えんのも面倒だし。”

——
“仕方ない。いいだろう。”

「貴様……最初からこれが目的で！」

“し——っ！人間に姿が見えねえんだから、変に思われちゃうだろ。リストラを仕向けたのはこの俺！人間はなあ、悲しいと絶望だけで終わるんじゃないよ。”

「……………！」

“絶望から、とてつもない怒りに変わるんだよ。”

「ハハッ……お兄——さんバイバイ！」

シリシリと犯人が青年に迫る。

“ 黙れ！お前は、偽装の魂で得た功績しかないじゃないか！人間の魂の本当の中身は、汚れている。”

“ 若い坊や。月騎士はなあ、功績を挙げてなんぼの世界。残念だったなあ。”

「おい！」

ハツとした瞬間、犯人のニヤケた顔と自分の腹の痛み。

「黒川……友吉……。どうか……助けてあげ……」

—— 知らなかった。私のために犠牲になった命を。

「そんな…バカな。俺は、なんてことを……」

—— 自分のしたことが、どれ程罪深いか、理解したと同時に、こんな俺を見守っていてくれた存在に驚いた。

「も、もう一人の担当者は？」

「任期は、ほんの僅かだったそうよ。貴方が自殺する時点に代わったらしいの。」

——おじさんなら、生まれ変われるよ。

「まさか…あの声の男か！」

「二人目の担当者は、一人目の月騎士の親友だったそうよ。親友の代わりに最期を看取ったって。」

「名前は……？その男達の！」

「それは、非公開なんです。月騎士のルールで、担当していた人間にバレてはいけないことになっているそうです。」

未だに暗い道を歩く二人。

「そっかあ…名前がわかれば、逢えるかもしれないのにね。」

「ああ…じゃが、もう逢う勇氣など、残っとらんよ。」

隠者は、少し悲しそうに笑っていた。

「でも、本当に逢いたくないの？」

「いや…しかし、逢うには、手掛かりがないと無理じゃ。」

「搜すよ！僕が！」

「ありがとうございます。貴方は、優しい方だ。もうすぐ、天国への入り口に到着ですな。」

光が見えてきた。

「ねえ、隠者様も天国に行ってみない？」

「いいえ…私は…」

真つ白の扉。

「では、ここでお別れでございます。よい時間を。」

エイッ

「うわぁっ——!!」

輝瞳は、無理矢理に隠者を天国へ飛ばした。

「ふう……逢えるといいな、隠者様。僕も行こー!」

眩しすぎる光に導かれるように飛び込んだ。

——今行くよ、二人とも。

美月の両親に逢うために……。

隠者と青年（前書き）

隠者である、黒川友吉は天国へ飛ばされます。

そこである奇跡の出逢いをします。

相澤陸は、黒川の担当者だった月騎士。
あいざわりく

風舞美月の両親、風舞輝夜、世絆。
かざまい てるや
せな

今は亡き、彼らの魂はどうなったのだろうか。

隠者と青年

——もう一度、生きたい。

ドンッ！！

「いたたた……。」

隠者は、輝瞳に無理矢理押し込まれたため、頭から落下してしまっ
た。

「あの……？大丈夫ですか？」

ハッと前を見ると、知らない青年が心配そうに私を覗きこんでいた。

「いや……いや。大変お見苦しいところをお見せしたようじゃ。私は、
大丈夫でございます。では……。」

「待ってくれ！」

青年が隠者を呼び止めた。

「何か…私にご用で…？」

「え…あ、いや。その……格好から察するに…貴方は、隠者ですか？」

「はい。私は、隠者。それが何か…？」

「……………！」

青年は、驚いた顔で隠者を見ている。

「…隠者などが、こんな美しい世界にいては、おかしいと思われるのも当然でしょうな。
すぐに仕事に戻らなければなりません。」

「しかし…用があるからここに来たんじゃないんですか？」

「はい…少し、人を捜してましてな。」

「どんな人なんですか？」

「それが……恥ずかしながら、わからんです。」

「一緒に搜しましょうか。」

「隠者の用事を手伝わせるとは、とんでもない。」

「いいんだ。貴方……いや、隠者が天国へ来るなんて滅多に無いことだから、興味があつて。とりあえず、座りませんか？」

こうして青年と隠者の話が始まった。

「貴方は、地獄から這い上がって来られたんですね？」

「そうじゃ。」

「辛いことも、あつたでしょう。」

「ああ……地獄は、とてつもない絶望に満ちた世界じゃった。

だが、生まれ変わるために、今まで必死で仕事をしてきたつもりじゃ。」

「どうして生まれ変わりたいと？」

「人間時代、自殺をしましてな。息子を殺された無念と、喪失感のまま飛び降りる。」

「……………」

「私は逃げることしか考えていなかった。一番楽な運命を選んだというわけじゃ。」

「なるほど……。」

「しかし、ある人から月騎士のことを少しだけ耳にしましてな。」

「月騎士……………」

「私の担当者のございます。真実を聞いた時、どうしてあの日、死ぬ選択しか出来なかったのか、非常に後悔しておるのです。」

「後悔を……。」

青年は少しだけ悲しそうな顔をした。

「はい。しかし、今度生まれ変わったら、どんなことから逃げ出さない、強い人間になりたいと思っています。」

「そうですね……もしかして、その月騎士が逢いたい人？」

「はい。しかし、名前は非公開。若い青年がこの私のために亡くなったとは……正直、受け止めるのが辛かったです。」

「……………」

「魂をチェックする際に、必ず幸せになれと願いを込め、人間界に送っていました。それは、その青年や息子に向けたものでもありました。」

「優しい方ですね。」

「いいや。ただ魂を見ながら、彼らではないかと、思ったかったです。」

しかし、やはり逢えなかった。手紙は書いていたんじゃない。」

一枚の手紙をポケットから取り出す。

「その話……僕の友人が同じことを言っていた。貴方は、黒川友吉さん？」

「ああ！そうじゃ！」

黒川は、驚きのあまり大声をあげた。

「やはり。しかし彼は、人間界へ旅立ちました。」

「そうか……！そうだったのか……。良かった。」

「貴方同様、彼から手紙を預かっていました。どうぞ。」

一枚の手紙を差し出す。

「これは。なんと！しかし、私の手紙は、結局、無駄になってしまいましたな。」

ハハッと笑う黒川。

「良ければ、僕が代わりに預かっておきましょうか…？自分で持っていて、仕方がないでしょう。」

「確かに自分で持っていて、仕方ありませんもんな。ありがとうございます。」

丁寧にお辞儀をした。

「こちらこそ。本当にありがとう。貴方なら、きっと生まれ変わる。また僕は信じていますよ。」

「え……また、とは？」

「黒川さん、もう仕事に戻らなくてはならない時間では？」

「ハッ！私としたことが…すっかり忘れておりました。」

「ふふっ…いつかまた生まれ変わったら、逢えるといいですね。では、また。」

「はい。奇跡はあるんじゃない……。本当にありがとうございます。では、また。」

隠者と呼ばれる黒川友吉は去っていく。

——黒川。よく、頑張ったな。

「あ！隠者様……！！」

そこにいたのは、少し目を腫らした輝瞳。

「どうしたんじゃない？」

「さっき、さっきね、逢いたかった二人を捜してたんだ。そしたら……」

「そしたら……？」

「もういなくなってたんだ。……生まれ変わったんだって。」

また輝瞳は泣き出した。

「それは、とても喜ばしいことではございませんか。」

「そ、そうだよ。幸せになれるよね……。」

「はい。そう願いを込めよう。」

——輝夜、世絆。

美月は、必ず守るから。

「そう言えば、月騎士と息子さん見つかった？」

「いいえ…。月騎士の方は、旅立ったようで。しかし、手紙を預かりました。」

「そっかあ…。早く読んでみてよ！」

「緊張しますな……。」

綺麗な白い封筒を開けると、丁寧に二つ折りにしてある手紙を手にとった。

ピラ……

——黒川友吉さんへ。

お元気ですか？

僕の親友から、貴方が地獄へ送られたと聞き、大変ショックを受けました。もし、僕が生きていたら…。貴方はそんな辛い運命を背負うことは無かったかもしれない。

そう思うと、苦しくて…。役に立てなかったこと、申し訳なく思います。

親友は、風舞輝夜と言います。物凄く頭が良くて、優しくて、何より思いやりがある。

だからこそ僕は、貴方の最期を彼に託しました。彼はきつと、貴方に対して勇気付ける言葉を贈ってくれたのではないのでしょうか？

貴方の人生、長い間、僕なりに一生懸命見て参りました。

生まれた時の赤ん坊の貴方を見たとき、感動したこと、今でも覚えております。この人間を何としてでも守ろう。そう感じたのです。

成長するにつれ、段々と大人らしくなっていく貴方。友達に苛められて、沢山嫌な経験もしましたね。受験勉強を必死にする貴方。辛くて泣きながらも懸命に乗り越えましたね。志望校に受かり、達成感や、嬉しさ、沢山感じましたね。

医者になる夢、現実になりました。僕は、貴方のその夢、知っていました。だから僕も、必死で考えましたよ。

そして、大切な人に出逢いました。本当はね、もっとお相手がいたんですよ。だけど、一番いい相手、選びましたね。結構人を見る目あることに感心していました。

新しい命も誕生しましたね。僕も嬉しかったです。

しかし、悲劇は起こり貴方にもふりかかってしまいました。

今までにない喪失感を感じていた貴方。

僕は、これまで色々な経験を貴方に積ませたつもりでした。

実は、この悲劇が起こること、知っていました。だけど、貴方には本当は、この先、長い人生があつた。だから、何とかしようと、僕があれこれ運命を与えました。

しかし…ダメでした。意外と頑固で融通が利かない性格からか、見向きもせずに、ただひたすら絶望の道へ進む貴方。

僕は、どうしても守りたかつた。

本当は、大好きで、長年の親友のようだったんです。

だから、月騎士としての限界を越える行動をしてしまいました。

すみません…。結構、貴方にはなんのプラスにもならなかった。

この行動に悔いはありません。でも不思議ですね。人間の人生を背負う月騎士の僕が、自分が殺されるという運命を知らなかったなんて。

僕ら月騎士の運命は、一体誰が決めているのでしょうか。でも、僕は確かに、自分の意志で動きました。

それと…息子さん、旅立ちましたよ。見届けて参りました。

最後に、ありがとうございます。貴方よって、僕の人生が豊かになったこと、間違いありません。

生まれ変わるまで、頑張ってください。努力家の貴方なら、軽いものでしょう？なんせ、僕が育てた美しい魂なのだから。

また、会う日まで。

P・S・おめでとう、黒川。僕は、もう旅立ちます。逢えてよかったです。

相澤陸あいばわづるくより。

「……………隠者様。会ったんじゃないの…？」

「……………先程の…青年。」

大粒の涙を流す黒川。

「息子も生まれ変わって…。」

もう一度、人間として生きたいものじゃ…。」

輝瞳は、手紙にあった輝夜の名前に驚いていた。

「輝夜らしいや…。幸せになれ。縛られず、自由な世界で。」

「まさか、逢えるなんて…。」

ペラ……

——名前も知らない貴方へ。

えと…。なんと言ったら良いか…私としては、初めまして…なので
すね。

今まで、私の人生を担当してくれた貴方は、一体どんな人なのでしょう
うか。

自分の身を犠牲にしてまで、僕を助けようとしてくれたんですね。
本当にありがとうございます。そして、ごめんなさい。

話を聞いた時、自分は自殺しか頭に無かったことに、後悔しております。

しかし、もっと生きたい…そう思わなかったのは事実です。

私は今、地獄で懸命に働いております。毎日、新しい魂をチェック
し、送り出す作業。周りは厳しく、人間時代よりも辛いかもしれま
せん。しかし、今度、死の番人、隠者への昇格が決まりました。

貴方が知恵や、経験を沢山与えてくれたおかげで、僕は様々な感情
を覚えていったのですね。

すべて、貴方が与えてくれた運命だと思うと、なんだか貴方の性格
が滲み出ているようで、面白いです。

貴方は、もう生まれ変わったでしょうか？まだだとしたら、もう一
度、貴方に逢いたい。そう願わずにはいられません。

最後に、いつかまた会える日まで。

本当にありがとう。貴方のような優しい方に出逢ったこと、私は誇り

に思います。

黒川友吉より。

「黒川…。おめでとう。後少しで…。」

大粒の涙を流す青年。

「相澤陸さんですね？おめでとうございませう。生まれ変わりの準備が整いました。」

「はい…。あの、」

「なんででしょう？」

「新しく生まれ変わる僕の記憶に、この手紙の記憶を入れることは…。」

「貴方が心でずっと忘れないと願ってれば、生まれ変わっても必ず覚えているものです。」

「そうか…。心に染み付いてるもんな。」

「では、参りましょう。」

「はい。」

黒川は、カプセルに入れられる。

涙を流しながら最期にこう言った。

「また、逢えますように…。」

ビューン……

黒川は、小さな美しい魂となった。

残ったのは、青年の生きた証が書き残した手紙だけだった。

人間の少女（前書き）

美月が学園を出てからの話です。

人間の少女、天羽優心あまづにこが登場します。

そして、新たな敵、龍神剣りゅうしんけん。

二人とも、これからの重要人物です。

人間の少女

「美月！美月っ！」

——どこ行っただよ、まったく…。

美月が教室を出ていった後、行方がわからなくなっていた。

天空は、学園を飛び出して美月が行きそうな場所を考えていた。

すると、突然、天空の前に黒い渦が現れた。

「なんだ…！？」

「ご機嫌よう、藤真先生。あなたもご苦労様ね。」

そこに現れたのは、小夜先生だった。

彼女の周りには上層部の護衛班もいる。

「何ですか？小夜先生。」

彼女から嫌な気配を感じ、天空は、身構えた。

「ふふっ…。あの娘を想う貴方の心は、汚れているわね。そして、上層部の敵となる存在。」

「上層部の敵…？」

「先程、上層部から命令が下ったわ。」

——なんだ…？

「藤真天空は、今日を最後に、月騎士を引退せよ」と。

「……………！」

——夕方、雨が降っている人間界。

「最悪……せつかく来たのに雨なんて。」

雨は、勢いを増してきた。

——あたしを歓迎してないって訳ね。

しばらく雨に打たれながら、フラフラと歩いていると、傘売り場を見つけた。

「って言っても、傘買うお金持っていないし……。」

美月は、お財布の中を見た。

「地上界のお金なんて、使えないわよね。」

——まず、お札の顔違うし……。

これじゃ人間界では、ニセ札よね。ただの紙切れと同じか……。

やっぱり帰ろうかしら……でもあんな風に学園を抜け出してきた以上、すぐに戻るのもどうかと思うし……。

「あの…大丈夫ですか？」

美月が困っていると、いきなり後ろから声を掛けられた。

後ろを振り返ると、美月と同じ年ぐらいの少女が立っていた。

「良かったらこれ、使ってください。」

差し出された花柄の可愛い傘。

「え…いや…大丈夫ですつ。」

本当は、とても嬉しかったが、相手が濡れるのが気になって受け取れなかった。

「いいんですよ。はい。」

少女は、まるで美月の心を読んだかの様に言った。

そして、いつまでも突っ立っている美月の手を引っ張り、無理やり持たせた。

「あ……。」

じっと少女を見つめる美月。ある異変に気付いた。

「あの、何か……？」

自分の顔をじっと見つめられて、不思議に思ったのだろう。

「あ……いいえ。なんでも。傘……どうも。」

少女はニコツと笑って、足早でもなくゆっくりと歩いていく。

「あの子、ちょっと変ね……。」

美月は、少女の背後にいた影が気になり、後を追ってみた。

すると……

「やっぱりね。」

——担当者が違う…。誰よあれ。

「さあて、どうしましょうか。」

——あたしとあの少女は関係ない。

助けようか放っておこうか迷う美月。

自分の持っている可愛い傘を見つめた。

「ふう…。仕方ないわね。悪い子じゃなさそうだし、それに天空も絡んでるみたいだしね。」

——えっと…助けるには、あの子を眠らせなければ……。とにかく、人目のつかないところに連れていくしかないわね。

美月は、早足で少女に近付く。

「ねえ、ちょっと…。」

「はい…。あつ、貴方はさっきの。」

後ろから声をかけられ力無く振り向いた少女は、顔色がかなり悪かった。

「濡れて帰るのも風邪をひいてしまいますから、一緒に入りませんか？」

美月は、少女が怯えないように優しい声で提案してみた。

「大丈夫です。私にお構い無く…。本当に平気ですから。」

そうして彼女はまた歩き出そうとする。

「待って！貴方の顔色が優れないからそう思ったの。傘を貸してくれたお礼に、家まで送ります！」

「え…」

少女は、しつこい美月に観念したのか、家を教えた。

「ここです。」

少し歩いて、少女が指差したのは、小さなアパートだった。

家に着き、美月は、少女の後ろから玄関に入る。

「わざわざ、ありがとうございました。」

少女が振り向いた瞬間。

「きゃっ!!」

美月は、いきなり少女の額を掴み押さえる。

「何するの……!!」

少女は抵抗するが、力が入らない。

「ごめんなさいね、手荒くて。」

——早くしないと、この子が危ない。

ボオと美月の手から光が放たれ、意識を失う少女。

ドサッ

少女は、玄関の壁に倒れた。

「ふう……何であたしがこんなことまで。

さあ、早く出てきなさい。」

ゴ——……

突然現れた黒い渦。

美月は、一瞬、闇に引きずり込まれる感覚に襲われた。

「ククク……さすがは輝夜の娘だ。俺の闇術にかからないとは。」

現れたのは、長身の黒い服を着た男。

——お父さんの知り合い…？

「貴方は誰…？」

「俺は、龍神劍。りゅうしんけん」

初めまして、お嬢ちゃん。お前のお父さんのことは、よく知ってるよ。」

不気味に笑う男。

「貴方は、この少女の担当者じゃないわよね？」

「ああ。もうすぐこの娘は死ぬだろ？」

お前にも死期が見えてるはずだ。

月騎士が不在のまま最期を向かえるなんて、人間として可哀想だと思わないか？」

「それでも、人の担当を奪うなんてルール違反よ。本来の担当者は、藤真天空のはず。なぜ貴方が？」

龍神は、腕を組みながら興味深そうに美月を観察していた。

「ククッ…。奴はなあ、もう月騎士を引退したんだぜ？」

心の中で驚く美月。

「どっいつこと…？とにかく、その少女から手を引いて。」

「藤真のことは、詳しく聞かないのか。奴は、あんなにお前のことを心配しているのに？」

ニヤリと笑う龍神は、二人が面白くて仕方がなかった。

「まずは、この少女が第一優先よ。貴方は、どうする気なの？」

「可哀想な藤真。なんにも想われちゃいないみたいだ。

さてと……早いとこ終わらせちまわないとな。」

手には鋭いナイフが握られていた。

「殺す気なの…？」

「ああ。お前に究極の絶望を味合わせるために。」

「どういう意味よ。」

この少女、あたしと何か関係が…？」

「うるせえな！！黙れ！」

俺はなあ、この仕事で月騎士の昇格がかかってんだよ。

大体、お前に見つかるなんて、予想外だったぜ、手間掛けさせやがって。」

そう言っつて少女の首にナイフをあてる。

美月は、手に短剣を握り、構える。

「その子から離れてって言ってるでしょ？」

逃げなかったこと、後悔させてあげるわ。」

——龍神剣。なんなの…。

「やる気か？お嬢ちゃん。俺は結構手強いよ。」

ま、ガキの頃から上に鍛え上げられてるから、少しは相手になるか。

まずは、お手並み拝見としよう。」

龍神は闇呪文を唱え始めた。

辺りは闇に包まれ、殺気が漂う。

シュルル……

——蛇…？

シャアア——……

毒蛇が何匹も美月に絡み付く。

そして、ガブツと美月に噛みついた。

「あら……！」

「毒蛇だよ、お嬢ちゃん。呆気ないね。もう動けないだろ？」

美月の心臓めがけてナイフが飛んできた。

「ククッ。」

見事に心臓に的中し、美月はそのまま倒れた。

「へえ。なかなかやるね。お嬢ちゃん。」

龍神がバツと振り返った瞬間、剣と剣がぶつかった。

「…毒蛇が効かないのか。面白い。」

龍神は、闇に消えた。

ビューン

後ろから飛んできたナイフをかわす。

「かわしてばかりだなあ。早く攻撃してみろよ。」

——これじゃ、きりがない。

美月は、さっきの蛇と交信をした。

——主の元へお行き。

シュルル……

「見つけた…。」

蛇はある一点に静止した。

「チツ。まだガキのくせに調子に乗りやがって。」

「蛇の扱いは得意分野なの。」

美月は、どんどん攻めて行く。

追い詰めて、止めを刺そうとした瞬間、

「お嬢ちゃん、残念だな。俺の勝ちだ。」

気付くと、自分の手足が何かの糸で引つ張られていた。

「あたしとしたことが、いつの間に…。」

「もう動けないだろ？可哀想に、捕らわれた獲物のようだ。」

そう言いながら、美月の側に近付いてくる。

「お前を殺す命令は出てなかった。」

ただ上層部は、この少女を殺せと。けれど…風舞美月。

お前を殺すことで俺は最強の月騎士になれるかもしれない。」

「ふふっ…上層部の命令に背いていいの…?」

「ククッ…。奴等にはこの俺様が必要なんだよ！お前じゃない。」

「そうかしら…?」

——あたし、ここで死ぬのね。

「最後に一つだけ教えてやろう。」

鋭いナイフが心臓に向けられる。

「月騎士で感情を持つ者は、必ず最期に滅びるんだよ。」

ニヤリと笑って、ナイフを振りかざす。

「……………!」

自然と目を瞑っていた美月だが、痛さは感じない。

恐る恐る目を開けると...

「あつ！天空の……。」

そこにいたのは、教室にいた四体のモンスター達。

「何だ！こいつら！」

彼らは、龍神の全身に容赦無く食らい付く。

一体のモンスターが、美月の身体に絡む糸を解いた。

「あつ……！あの子！」

——姿が見えない！まさか、龍神に！

——安心しろ。天空様のご命令であの娘は、我々が確保している。

天空のモンスター達は、あの少女の味方の様だった。

「クッ……藤真め……」

敵わないと思ったのか、龍神は黒い渦に巻かれていく。

「クソ……。風舞美月……この手で殺してやる。」

部屋は、さっきまでの明るさを取り戻した。

残ったのは、美月と少女とモンスター達。

「どうも。助かったわ。」

——天空様のために助けただけだ。

——この少女は、天空様の担当の人間。守る義務があるのだ。

「そう……。あの、天空はなぜ月騎士を辞めたの……?」

——お前のせいだ。お前さえいなければ主は苦しまなくてすんだ。理由を知りたければ、地上界に戻れ。

そう言ってモンスター達は姿を消した。

「あたしのせい…？」

少女は、きちんとベッドに寝かされていた。

ガチャガチャ…

鍵が開く音が聞こえた。

「天羽さん！？天羽あもつにこ優心さん！」

どうやら救急隊員の様だった。

「病気…。でも、もう大丈夫よね。あのモンスター達が呼んだのかしら。」

——とにかく、あたし戻らなきゃ。

美月は、救急隊員に運ばれるこの少女を見届けた後、嫌な予感を抱

いたまま、人間界を後にした。

悪の心を持つ者（前書き）

人間界に戻った美月^{みつき}。

彼女に悪の言葉を囁く、上層部リーダーの桐谷海斗^{きりたにかいと}。

駆けつけた天空^{かなた}の目の前には、血塗れの輝瞳^{きりつと}がいました。

悪の心を持つ者

——月が赤い夜。

「美月……。」

「来ないでっ！それ以上近付かないで！」

手には血だらけのナイフ。

側には輝瞳が血塗れで倒れていた。

「誰もあたしを助けてくれない。もう何もかも嫌なのよ！」

ナイフを自分に向ける美月。

「お母さん、お父さん……！」

——数分前。

「人間界に無断で行ってしまったことは、ごめんなさい！

だけど、天羽優心っていう人間のことは、何も知らないの！」

「うん。知ってるよー！でもね、美月ちゃん。アレは、君の担当する人間なんだよ。」

満面の笑みで近付く、長身の男。

それは、あの上層部のリーダー格の男、桐谷だった。

「あと少しで、君の心を封印出来る。今まで頑張ったよねえ。お疲れ様！」

「どういうこと...？」

「お父さん、お母さん、次は誰を犠牲にしようかあ？」

「……………！そんなこと、あたしが許さない！」

ククツと笑いながら、美月の傷を抉り、陥れようとする。

「あつ……！やっぱり美月だぁ！おーい美月！」

輝瞳が手を振りながら、こっちに走ってくる。

「少年よ。グッドタイミング！あの子にしようっと！」

桐谷は、極上の獲物を見つけたように、輝瞳を凝視した。

「輝瞳——！こっちに来ちゃ駄目よ——！」

美月は己の限界まで声を出した。

「えー？どうして？」

実はね、美月にどうしても伝えたいことがあってさ！ねえ、見てよ——！……」

すると、輝瞳の背後に黒い邪悪な影が現れた。

次の瞬間……

「輝瞳っ!!」

ザシュ……!

「…………っ!!」

「きゃ——!!」

迷うことなく、桐谷はナイフで輝瞳の腹を一突きにした。

「美…月…。」

バタッ

輝瞳は、地面に倒れ、美月はあまりにショックで声が出なかった。

桐谷は、血だらけのナイフを持ち、美月に近付いてくる。

「ねえ、美月ちゃん。あれは、君がやったんだよね？酷いことするなあ。」

ナイフを啞然とする美月に持たせる。

「ち…違つ。輝瞳っ！！」

美月は、フラフラした足取りで駆け寄った。

「輝瞳！しっかりして！」

すると、美月の後ろから、そつと…桐谷が囁いてきた。

「君は、輝瞳に憎しみを抱いていた。ずっ—と前からね。」

あの日…輝瞳が、風舞家に来なければ、両親の愛情を独り占め出来たのに。」

——あの日は、美しい月の夜だった。

「あの…えつと、輝瞳です。これからお世話になります。」

ぺコッとお辞儀をする少年。

「まあ……容姿も可愛いけど、輝瞳って名前も素敵よね、輝夜。」

「ああ、今日からお前は、風舞家の子だよ。」

美月、ちよつとおいで。」

「なあに？お父さん。」

お父さんに呼ばれて、あたしは二階から降りていく。

そこには、おどおどしながらこちらを見ている知らない男の子がいた。

「訳あって、この子を我が家に住まわせることにしたよ。そして、この子は…人間なんだ。」

「美月、前から兄弟がほしって言ってたでしょう？いいじゃないの。」

お母さんはニッコリ笑った。

「わぁ……………！」

——たとえば、輝瞳にどんな理由があろうとも、あたしは嬉しかった。

「輝瞳です。美月ちゃん、よろしくね。」

——やっぱりすごく嬉しかった。

「うんっ！輝瞳君。」

——だって、人間と一緒に暮らせるなんて……………夢みたいだったから。

「あたしは、ただ嬉しかった。輝瞳が家に来てくれて。」

「おやおや、違っただろう？」

それは、君の悲劇の始まりなんだから。」

「悲劇……？」

——太陽が降り注ぐ穏やかな日。

「こっちにおいで、輝瞳。」

大好きなお母さんが、あの子を抱っこする。

「輝瞳、キャッチボールでもしようか？」

大好きなお父さんが、あの子と遊ぶ。

「ほら、君の大好きだった二人がいるよ。」

でも、二人が見つめているのは、あの子だけだ。」

あたしが大好きなお母さんとお父さん。

また、一人だけ残されたあたし。

居場所は、ここしかなかったのに…あの子はすべてを奪う存在。

「輝瞳、うまいぞ！もう一回！」

「凄いわね〜！上手上手。」

許さない…あたしから家族を奪ったあの子。

「よくわかっただろう？あの子が君の人生を狂わせたんだよ。」

「輝瞳…憎い憎い憎い。」

美月は、次第に憎悪の気持ちが大きくなった。

「そう。美月…それでいいんだよ。君も楽になったんだよ。」

こうして邪魔者が消えてくれて、嬉しいね。」

血塗れで倒れている輝瞳。

「そうよね。嬉しいわ、とっても。これで、お母さんとお父さんはあたしのもの。」

桐谷がニヤリと笑った瞬間…

「やめる。」

桐谷は、冷酷な声の主をチラリと見た後、スッとその場から砂のようになくなって消えた。

「美月…。」

すべてを把握した天空は、ゴールドの瞳からブルーの瞳に変化した。

天空の瞳を見た美月は、一瞬動けなくなった……

徐々に落ち着いて、現実に戻っていく美月。

「天空よね…？あたし…！」

自然に涙が溢れた。

「来ないで！あたしに近付かないで！」

美月は、ナイフを自分に向けたまま震えていた。

天空は、ゆつくりと、怯えさせないように近づいていく。

「そのナイフを放せ。美月。」

自分が持っているナイフを見て、倒れている少年を見る。

「輝瞳…？どうしたの…まさか、やっぱりあたしが？嘘よ…そんなはずない。」

混乱して話が聞けなくなっていた。

「落ち着け。まず、そこを退くんだ。」

美月は輝瞳の前に立っていた。

「嫌よ…どうしよう。輝瞳は死んだ。あたしが殺したの。」

美月は、完全に自分を見失っていた。

「そっだ…お父さんとお母さんは、どうして死んだの？ねえ、教えてよ。」

その場に崩れる美月。

「もう何もかも嫌だ…。」

自身の首にあてているナイフに力が入り、少し出血する。

「美月！お前はもう月騎士なんだ。…一人の人間がお前を待っているんだぞ。」

「どういことよ…あたしは、どうすればいいのよ！」

思いつき振りかざしたナイフは、自分に届く前に、天空が取り上げた。

「美月……」

天空の手は、ボオッと光を放ち、美月の頬を包む。

「少し眠るといい……」

「やだ…輝瞳……」

目が完全に閉じたのを確認し、天空は、美月を横にする。

「本当に邪魔者ですねえ、天空君。

少しお仕置きしてあげたんですよ。人間界に行った罰にねえ。

いや、しかし風舞美月の心はもう戻らない可能性大です。

優しい感情という汚れたものを持つ者は、やはり脆いですねえ。」

天空は、黙って輝瞳の傷を塞ぐ。

「おや！君には、治癒能力があったのでしたねえ！すっかり忘れてましたよ。なんだ、この少年は、助かってしまっのかなあ。」

「早く、立ち去れ。」

天空は、殺気立っていた。

「僕に命令するんですかあ？もう月騎士でもなくせに。」

全身から汗が滲む。

——クソッ。俺の力じゃ、足りないか。

「大丈夫ですかあ？このままだと、君が死んでしまいますよ。」

普通にしても、身体が辛いのに。」

天空は、なぜか苦しそうにしている。

「随分と汚いやり方ですね。まさか今日から実戦だったとは。」

「騙された先生が悪いのよ?」

そこには、あの女教師、小夜さよがいた。

「貴方は、上層部の仲間だったんですね。存在を知りませんでした。得体の知れない者は、きちんと調べなければならぬと学びましたよ。」

「ふふつ。それは、何よりね。」

「どうせ、ろくでもないことを企んでいるんでしょうね。美月は、俺が連れて帰ります。」

「それはダメ!だって、彼女はもう月騎士の仕事があるんだから。」

一瞬の沈黙の後、天空は、二人を睨んだ。

「お前達、本当の目的はなんだ?美月を何に利用するつもりだ。」

天空は、まだ傷が癒えていない輝瞳をおぶる。

「それは、ひ・み・つ！今ここで言ったら、面白くなるんじゃないかあ。」

「桐谷…人を私欲のために使つと、最後にアンタは堕ちるぞ。」

「さあ…それはわからないよ。果たしてが堕ちるのは僕だけかなあ…それとも、予想外の相手だったりして！」

桐谷は、意味深な言葉を吐く。

「予想外の相手？」

「ねえ、天空君。この世で一番強いのは、悪の心なんだよ。憎しみ、恨み、欲…。」

優しい心はね、いつか必ず破滅を招くのさ。

悪はね、どんな力にも打ち勝つ強い念が込められているんだよ。」

「悪の塊のアンタは、俺からしてみれば、可哀想だけどな。悪も、最後には破滅するぞ。」

天空の言葉に微笑し、姿を消す二人。

「これから、本当の悲劇が始まりますねえ。」

サア―…

微かに風が吹いた。

「天空様。」

「屋敷まで急いでくれ。輝瞳の傷が塞がらないんだ。」

「かしこまりました。」

メイドは、天空から輝瞳を預かった。

「天空様、美月様はどういたしましょう?。」

「美月は、少ししてから俺が屋敷に運ぶ。だから、その間、輝瞳を頼む。」

「はい。」

メイドは、丁寧にお辞儀をした後、バツと一瞬で姿を消した。

「美月……………」

天空は腰を下ろし、横たわる美月を見つめた。

「いざとなったら、まだ手があるだろう…。」

——自分が犠牲になれば、美月は助かる。

横たわる美月の目から、一筋の涙が零れ落ちた。

——すべてを知った時に、お前はどんな顔をするだろうか。

「その時は、もう俺はいないはずだ。」

天空は、無表情で赤い月を見上げた。

「桐谷さん、いいの？」

上層部の秘密の秘密で、桐谷は一人、双六をして遊んでいた。

「大丈夫。まだ若干心が残っていても、時が経てば美月は、徐々に真実を知ることになるだろう。」

「月騎士として仕事をするってこと？」

「うーん…僕的には、天空君がキーパーソンになる気がするんだよねえ。」

桐谷は、サイコロを振りながら、愉快に話す。

「あ！一回休みだって。」

「意味がわからないのよね。貴方っていつも説明不足。」

「だから！天空君の存在が無くなった後、美月は堕ちるってこと。人はね、堕ちるともう元には戻れないんだよ。」

「どんな道が残されているのかしらね。」

「もちろん、僕らの仲間になる道か…もしくは自己破滅か…。」

——これからが悲劇の幕開けさ。……いや、すでに遠い昔から悲劇は始まっているか。

「最期に笑うのは、一体誰かなあ？」

二人の行方（前書き）

美月と輝瞳が屋敷から姿を消してしまいます。

藤真家のメイド、花蘭がまた登場します。

実は、彼女が一番最強かも？

二人の行方

——藤真家の屋敷。

「天空様、少し休まれてはいかがですか？」

「え……！」

メイドは、天空を心配するような言葉を発した。

「いきなりびっくりさせるな……ついには花蘭からそんな言葉が聞けるとは。」

天空は、心を持たないメイドが自分を気遣うことを言ったので、驚いていた。

「天空様と輝瞳様がお出掛けになった後、美月様とお話をしたのです。その後、私なりに考えることができました。」

「そうか。で、何を考えたんだ？」

「美月様の真似をすれば、人間になると。」

「は…？」

——何を言ってるんだ、お前…。

「ん……」

近くに寝ていた美月が、そつと目を開けた。

「美月…？」

聞き慣れた、優しい声のする方へ、ゆつくりと振り向く美月。

「あつ……！」

目を見開いて天空を見るその顔は、悲しみに満ちていた。

何も言えない美月は、ただ震えていた。

「やっと起きたか…。つたく、人に心配掛けさせるの得意だよな、お前。」

それと…安心しろ。輝瞳は、まだ生きてるぞ。」

「……………うつ…。」

美月は、涙が見えないように、ガバツと布団を被った。

「見ないでよ。あんな酷いことをしたあたしなんて、もう生きてる価値が無い！」

天空とメイドは、目を見合わせた。

「どう思う？花蘭。」

「はい。私が拝見した所によりますと、いつもの美月様に戻られたようです。」

「そうだよな…。あーあ、心配して疲れた。」

俺の寿命…確実に縮んだ、絶対。」

バタッ…

天空の言葉の後、急に、何かが倒れたような大きな音がしたので、布団から飛び起きてしまった。

「え…！天空、大丈夫っ！？」

そこには、屍餅をついた天空が少し痛そうにしている姿があった。

「ああ…大丈夫大丈夫。寝てなくてな」。

お前のせいだぞ。」

天空は、「冗談を言ってうまく誤魔化す。

「あたし、輝瞳を恨んでたの…？」

——殺したのは、本当にあたし自身なの？

「心配するな、それに…あれは、お前がやったんじゃない。」

「本当に？でも、あたし昔のこと思い出して、おかしくなったの。」

美月は、辛くて頭を抱えこんだ。

「なぜか急に憎しみの念が強くなって…輝瞳なんていなければいいって思ってしまった。」

「それは、操られていたんだろうな。上層部の奴等に。」

「一瞬、残り少ないあたしの心が持っていかれそうな感覚になったの。」

「美月……。」

——あたしは、酷いことをした。

「え……！」

すると、この部屋にいるはずのない輝瞳が、突然、美月の目の前に現れた。

「美月、もう怖がらなくて大丈夫だよ。」

それとも…僕や、天空が美月のこと守ってるだけじゃ、不満なの？」

——輝瞳……？どうして。

「さっきのことは、何にも気にしなくていいよ。すっかり、治ったよ。」

でも…なんか身体が軽いんだ。」

ニコニコ笑う輝瞳。

「美月、おい大丈夫か…？」

輝瞳は、サア…っと消えた。

「今、輝瞳があたしの目の前に…。まさか！」

辛そうな顔をする美月。

「…なんだって？そんなはずない。」

「天空様。」

メイドは、何か危機を感じたようだった。

「ああ…わかってる。美月、まだお前に話したいことが山程あるんだ。少し、ここで待っていてくれ。」

「急に慌ててどうしたの？やっぱり輝瞳は…！…！」

「大丈夫だから。まだお前は、寝ていなさい。」

メイドがドアを開け、天空は部屋を出ていこうとする。

「絶対にこの部屋から出るなよ！絶対だ。わかったな？」

天空は、美月がコク…っと頷いたのを確認してから部屋を後にした。

ボタン……

「行っちゃった…どうしよう。」

——輝瞳。まさかそんなはずない。

「助けて……。」「

「助けてあげようかあ？」

「……………！誰っ？」「

誰もいないはずの部屋に男の声が響いた。

「ジジャーンっ！！」

黒い渦を巻いて、姿を表した人物は……

「桐谷様………！」

先程のことを思い出して、後退りする美月。

「しー！バレちゃうって！

こんばんはあ、美月ちゃんつ。ククツ…そんなに怯えないでよあゝ
君をわざわざ迎えに来たんだから。

もうすぐ時間なんだよねえ。」

「時間………？」

「うんつ。お仕事の時間！そして、君は月騎士として正式に認めら
れたんだあ。やったね！」

「まさか…やっぱりあの人間があたしの担当者？」

「ピンポーン！大正解っ！ってことで……」

桐谷は、闇呪文を唱え始めた。

「待つてよ！輝瞳のこと、まだ言いたいことが沢山あ………」

美月は、急に目眩がしてそのまま意識を失った。

「……完全に封印出来ていなかったか。なかなか手強いねえ……。」

桐谷がパンツと手を叩くと、地面に黒い穴が空き始めた。

その穴は、次第に大きくなっていく。

ゴォ——……………

「出ました！人間界に繋がる空間。」

倒れていた美月を、そのまま穴に落とした。

「ニャ……。」

桐谷の側には、黒猫が一匹。

「さっちゃん、監視を頼むよ。」

返事の代わりに、尻尾を振り黒い穴の中へ入っていった。

「さて、用事は済んだし、帰ろっかな。」

ククッ… あっちも面白いことになってるな。」

「輝瞳！大丈夫か？」

——これは…！

「花蘭。」

天空とメイドが治療室に入った時、輝瞳の姿は無かった。

「辺りを搜索してまいります。」

「ああ…、頼む。」部屋は、荒らされた形跡は見当たらない。

「あれは、死の予兆じゃなかったのか…？」

地上界の者は、必ず親しい者の目の前に現れてから亡くなる、という説が昔からあった。

そして、死んだ時は人間のように遺体は残らず、無数の真珠になって残るのだ。

——真珠は無いな。だが、死んだということは、まず有り得ない。

——桐谷達が姿を消した後、俺は輝瞳の傷を治すために、屋敷に戻った。

「お帰りなさいませ、天空様。」

「どうだ？輝瞳の具合は？」

コートも脱がず、早足で治療室へ向かう。

天空の後ろには、きつちりとメイドがついていた。

「はい。天空様が傷を半分塞がれたお陰で、無事でございます。

今、私の力でもう半分の傷を治療致しました。」

「そうか。悪いな…。俺は治療室で少し様子を見てみるから、美月を頼む。」

「かしこまりました。」

メイドは、天空がおぶっていた美月を軽々と受け取り、部屋へ連れていった。

ガチャ……

天空は、治療室に入り、ベッドに横たわる輝瞳の所へ行く。

「大丈夫そうだな。」

ナイフで深々と刺された痕は、若干残っているものの、完全に傷は塞がっていた。

そして、スヤスヤ眠る輝瞳を見た後、鍵を閉めた。

天空が色々と考えていると…

「天空様、地上界すべてを捜しましたが、見当たりません。」

「なんだと?」

頭を抱える天空。

「申し訳ございません。」

「いや…お前の力は、俺が認めている。」

ターゲットを捜す能力は、誰よりも優れているってな。」

メイドは、返事の代わりに、お辞儀をした。

「だとしたら、地上界以外の場所にいることになるな。屋敷の結界はどうだ?」

「はい。結界はどこも破れていませんでした。」

そう言うメイドは、もう一言、何かを言いたそうだった。

「なんだ？考えがあるなら、言ってくれないか。」

「はい。輝瞳様が自力で外へ行く事は、不可能だと思われます。

部屋を出るには、天空様がお持ちの鍵が必要です。つまり、輝瞳様は、何者かに連れ去られた。結界を破らずに……。」

天空の結界は、地上界では最強と評判だった。

誰一人、破れる者はいない。

「天空様以上の力を持つ者が犯人、と思われた方が良いかと。」

「上層部は、入れないはずだ。誰も。」

「はい。犯人は、上層部の上をいく存在です。」

「まさか……！」

「なんだよ！！お前ら！」

黒いコートを身に纏う軍団。

「地上界、上層部だ。龍神剣。貴様は、桐谷様のご命令に従事出来なかった。よって、処罰を下さなければならぬ。」

ジリジリと近付いていく。

「あれはなあ！俺のせいじゃねえだろ。風舞美月が…」

「わかったよお、もう一度、君に極上のチャンスを与えよう！」

ニヤリと笑って上層部の軍団の前に立ったのは、あの桐谷だった。

「なんだよ、これ。」

治療室から戻って来た二人の前には……

「なんで、人間界の扉が……」

——ガタガタ……

「はっ！！」

「天空様っ！」

メイドは、音のする方から、天空を庇うように立つ。

——クマのぬいぐるみ！？

美月の誕生日のために買っておいた、クマのぬいぐるみが動き出した。

テクテク……

クマは、二人の前まで歩いていく。

「さつきは、お邪魔しました！彼女は、人間界に仕事に行きました。
月騎士バンザイ。」

ガッツ…バンツ

それだけ言つとクマは、破裂して、中身が飛び出した。

「どうしたらいい…花蘭。」

美月が寝ていたベッドに座り込む天空。

「天空様。身体が痛みますか？」

「わかるのか。」

「表情を見れば、わかるように勉強致しました。私に、ご命令を。」

心がないメイドは、俺に命令しか求めない。

「ああ。まずは、輝瞳を捜し、見つけ出せ。美月は、俺がなんとか

する。」

「かしこまりました。」

バツと消えるメイドを見届けた後…

ゴホッ…

血が付いた手を無表情で見る天空。

——多分、美月を人間界に連れていったのは、桐谷。じゃあ、輝瞳も…？上層部でも俺の結界を破れる奴がいたのか…？

「桐谷。どれ程の力を持っているんだ…。」

天空は、残された無様な姿のぬいぐるみを見つめることしか出来なかった。

偽りの人間（前書き）

美月^{みつき}は、上層部のリーダー^{きりたに}桐谷によって、人間界に飛ばされてしま
います。

人間界では、天羽優心^{あもつ にこ}という少女が登場します。

偽りの人間

「お父さんっ！早く早く！」

「美月、わかったから。」

太陽が降り注ぐ地上界。

「ほら！見てよ！」

幼い美月が指差す方には、美しい蝶。

「まさか…本当だ…」

地上界で見られるなんて。」

この世界に、昆虫というものは存在しない。

「わあ……綺麗だね。お花にとまったよっ！」

キラキラした眼差しで、蝶と呼ばれる生き物を見る。

「夢みたい…！人間界と同じ生き物があるなんて…。」

「お父さんも驚いているよ。…でも可哀想に。道に迷って、間違っ
てここに辿り着いたんだろっな。」

「違うよ。」

「ん？」

あたしは、真っ直ぐにお父さんを見た。

「間違えてなんかいない。この蝶は、きっと、地上界に来たかった
んだわ。前から夢みてたのよ。」

人間界に行きたいあたしのように。

夢が叶ったんだわ。

だってほら、あんなに楽しそうにしてる。」

そんなあたしを見て、お父さんは苦笑いした。

「そうだよな。来れて良かったんだな。」

美月は、人間界が好きか？」

お父さんは、あたしと同じ目線になった。

「うん！人間が大好きなの！ねえ、お父さんは……」

サア——……

「お父さん……。」

さっきまで隣にいた優しいお父さんは、今はいない。

「あつ………！」

美しい蝶は、花と共に消え失せる。

——やだやだ。消えないで！

「きゃ——！」

「ちょっ…大丈夫ですか!？」

バツと目を開けると…

「……はぁ……良かったぁ。」

あの例の少女が安堵の溜め息をついた。

「嘘! えっ!？」

美月は、ガバツと起き上がり、目の前の状況を必死で把握しようとする。

「…ここは、私の家ですよ。」

「貴女…どうして…」

——あたしは地上界にいたはずじゃ…？

「おっ…覚えていないんですか？昨夜のこと…」

バタッ

「きゃ！」

急にどこからか大きな音が聞こえてきた。

——リビングかな？鍵はちゃんと閉めたはずだけど…。

普通なら身の危険を感じるところだが、なぜかそこまで怖くなかった。

優心は、音がした方へ…リビングへとゆっくり近付いていく。

「わっ……！」

ソファの下で上向きに倒れていたのは、紛れもなく、以前自分を襲った女だった。

優心は、そっと近付いた。

「息は、してる…。」

とりあえず、ホッとした優心だったが、やはり警戒して後ろへ下がった。

「なんなのよ。どうなってるの一体。」

鍵を開けた形跡は無く、どこから侵入したのかわからない。

優心は、美月を見て考え込んだ。

——私は、この女に襲われて、意識を失って…気付いたら病院のベッドにいたんだよね。

ここで大声で叫んで、助けを呼ぶのもいいが、なぜかこの女に興味があった。

——この女と話してみたい…。

優心は、そう思った。

「もう一度、会いたかったし。てゆうか、夢じゃ無かったんだ…あの出来事。」

——とにかく…様子を見ようかな。

「携帯電話つと…。」

——念のため、すぐに警察に通報出来るようにしなきゃ。

こうして優心は、美月をソファーに寝かせ、目が覚めるまで側で監視しようとした。

「そうだったの…。」

「はい。あの…どうやって家に入っただんですか？」

明らかに警戒している少女。

「ごめんなさい…。あたしにも…わからないの。けど、何も知らないから安心して。」

「じゃあ……家はどちらに？すぐ家族に連絡した方が…。」

「家族……？」

美月は、困ってしまった。

——まず、ここは人間界よね。この娘は、地上界の存在なんて知らない…。しかも、あたしには、家族はいない。

「なんか…すいません。」

急に優心が謝ってきた。

「何が…？」

「いや…言いたくなさそうだったから…。もう少し、ここにいてゆっくりして下さい。」

少女の警戒心が少しずつ無くなっていくのがわかった。

「……………」

「じゃあ…もし良ければお名前を教えてくださいませんか…？」

——この少女が、あたしの担当の人間。

後戻り出来ないと感じた美月は、初めて優心に視線を向けた。

——綺麗な人…。

優心は、素直にそう思った。

「あたしは……風舞美月。」

凜とした美しい声と、ブルーの大きな瞳で優心を見つめる美月。

「……美月。素敵な名前……。」

優心は、ポツンと呟いた。

「え……？」

「あつ……ごめんなさい。すごく名前と雰囲気は合ってた……。」

焦る少女が面白くて、可愛らしかった。

「貴女もね。天羽優心さん。」

……優しい心。少女の雰囲気は、花のように可愛らしく、穏やかだった。

「どうして私の名前を知ってるの?。」

「あ……。」

美月は、自分が人間でないことをすっかり忘れていた。

「えっと…その〜。」

困って言葉が出てこなかった。

「いいです。なんか、美月さんって不思議な人。飲み物持ってきてます。」

そう言って優心は、キッチンへ向かった。

——これから、どうしようかしら。天空。桐谷様は…。

「そつだ…時空の扉は？」

美月は、立ち上がり、あの時、桐谷が開いた時空の扉を探す。

「無いじゃない…。どうやって帰るのよ。」

すると……

ドサッ

机の上に、日記のような分厚い物が置かれた。

美月は、それをすぐに手にとった。

「これは…人生基礎ノートだね。」

ノートの表紙には、氏名の欄に、天羽優心と書いてある。

そっと、一ページ目を開けてみる。

天羽優心、女、日本、東京都に在住。 17歳。

その他に、血液型、家族構成、趣味、特技…プロフィールが載っていた。

二ページ目を開けてみると…

「授業で習った通りだわ…」

人生に起こる基本の出来事が載っていた。

ペラペラめくっていると…

「何これ…」

病院に入院、病院で過ごす…ほとんどが病院で埋め尽くされていた。

「歌手なのかしら…。」

しかし、所々にテレビに出演、歌手活動の文字があった。

「時間が無いわ。急がなきゃ。」

あの少女の最期は、また時間がある時に見ようと決めた。

美月は、パタッと本を閉じ、これからのことを考え始めた。

「時空の扉は、開かないのよね。じゃあ、仕事は出来るのかしら…少し試しで。」

暫くすると……

「きゃあっ…！」

キッチンの方から、声がした。

「アツッ〜い！！」

どうやら、少し火傷をしたようだ。

「なるほど。力は使えるのね。」

美月は、さっき優心が不注意で火傷をする、という運命を作っていた。

「ということ、もう始まっているのね。」

美月は、自分の手を見つめた。

「熱い！火傷しちゃいましたよ。あたしったら、本当にドジで。」

優心は、少し赤くなった手を冷やしながら来た。

「大丈夫…？ところで…一つ聞いてもいいかしら？」

「なんですか？」

優心は、自分の火傷の手から、美月へと視線を動かした。

「貴女は、あたしが怖くないのかしら？」

「それは…貴方が、私を襲ったから？」

二人は気まずい雰囲気になってしまった。

「…気付いたら、病院にいました。けど…傷とか、そういうものが無かったです。」

家の物を盗られていたわけじゃないし…。それに…。」

「医者からは、病院に来るのがもう少し遅かったら、助からなかったって…。」

美月は、病気の深刻さを改めて実感した。

「救急車を呼んでくれたのも、美月さんでしょう？だから、怖いと言っより、もう一度話してみたいって思ってた。」

「あたしが呼んだんじゃないのよ？」

「いいです。わかってますから。」

——救急車を呼んでくれたのは、モンスター達なのに…。

「ところで、何か困ったことがあるんですか？」

「え？」

「だってさっきから、そわそわしてるから。」

——この子、結構鋭いのかしら。さっきから妙ね。

何も喋らないでいると、優心の方から話し出した。

「ここに泊まってもいいですよ？家に帰りたくない事情があるなら……ですけど。」

美月は少し疑問を持った。

——まるで、すべてを知っているような言い方。けれど、人間があたり達のことなんて知るはずが無いわよね。

「じゃあ……お言葉に甘えて……いいかしら？」

——探さなきゃ……時空の扉を。早く。輝瞳に会わなきゃ。

今の美月は、それだけに必死だった。

「はい。私も、誰かがいた方が楽しいし。ちょっと迷惑かけちゃうかもしれませんが、それでいいなら。」

——迷惑って、病気のことがしら。

「全然大丈夫です。ありがとうございます。」

その後、美月は、小さな部屋に案内された。

「ここはね、お客さんが来るように空けてあったんです。って言うても、誰も来たことないんですけど。」

ふふつと悲しそうに笑う優心。

「そうなの。綺麗に使うから安心して。」

「大丈夫です。じゃあ…何かあったら向かいの部屋にいらんで呼んで下さいね。」

そう言う優心は、なぜか弱々しく感じた。

「ええ。じゃあ…お休みなさい。」

「お休みなさい。」

優心がいなくなった部屋を見渡す美月。

部屋には、ベッド、机、クローゼットなどまるで誰かが普通に暮らしていたかのような家具が置いてあった。

——やっぱり嫌な感じがする。でも、気のせいかしら…少女も優しい子みたいだし。

ベッドに近付き、横たわる美月。

「はあ…。それにしても、どうなってるのかしら。時空の扉が無いなんて。」

——もう帰れない…とか？

「輝瞳……天空。」

優心の人生基準ノートを手にして、抱き締めた。

——桐谷様。分かっているわ、すべてがあの人のお仕事。あたしを永

遠に闇へ閉じ込める存在。

「だけど、もう始まってしまったみたい。」

手をかざし、ノートに新しい記憶を刻む。

「あれ…なんか…眠く…」

パタツッと、不自然な眠りにつく美月。

ガチャ……

ナイフを持ち、眠る美月に近づく少女。

「いいわよ…早く殺ってしまいなさい。優心。」

ナイフを上を持ち上げる。今狙うのは、この女の魂。

「風舞美月…！消えるがいい。」

皇帝と女帝（前書き）

変貌してしまつた優心^{にこ}。

新たな人物、地上界の上をいく存在。

皇帝、女帝が現れます。

皇帝と女帝

美月にナイフを振りざした瞬間…！

「待て。」

「誰だっ！？」

ブワッと姿を現したのは、なんと血だらけの天空だった。

「そのナイフを離せ、天羽優心。」

ジリジリと優心を追い詰める天空。

「誰だ…！？お前は人間じゃないな？」

優心は、人が変わったようになり、言葉遣いまで違っていた。

「そんなことをしても無駄だ。地上界上層部よ。」

「何を馬鹿なことを。上層部がなんだと？この娘の邪魔はするな。」

優心は、以前の少女の面影を無くしていた。

「天羽優心よ。我の声が聞こえるか。」

「クッ…！」

優心のナイフを持っている手が震える。

「…邪魔をしないでよ！」

「どうやらお前の姿は、二通りあるようだな。美月を殺してどうする？」

「憎い女め。遥か昔からこの女の一族が憎かった。お前が一番良く分かってるはずだ。」

すると、男は、こう言った。

「辛いのか？究極の善の心と悪の心を両方知ってしまっただけ。」

「黙れ！この女の両親が憎い。」

「風舞輝夜、世絆のことか。」

「あいつらにそっくりなこの女は、あたしの人生の邪魔をする存在なんだ。」

優心の頭の中に、記憶が蘇る。

——優心ちゃん、本当は誰よりも優しいのよね？おばさん、わかってるから。

——優心ちゃんは、貴女の宝物でしょう。そうだ、優心ちゃん。おじさんの子供もね、君になんとなく似てるんだよ。

ニコツと笑い、自分に語りかける二人。

「誰よ…あれ。」

カラン…

ナイフは、静かに床に落ち、優心は気を失う。

男は、そつと美月に近付いた。

「久しぶりだな、美月…。もう少し側にいたいけど、今はお別れだ。
また、会おう。」

天空の手で、美月の頬に触れる。

「あゝら、皇帝様。こんな所で時間潰してていいの？向こうはヤバ
いんじゃないかしら。」

突然、一匹の黒猫が姿を現し、人の姿に変わった。その女は、小夜
さよだった。

「なめてもらっては困るな。お前達の行動は、我らに筒抜けだぞ。」

「そ〜う？随分余裕な態度ね。それに、早く帰らないとその男の身

体も朽ちてしまっんじゃないの？」

皇帝と呼ばれる男は、溜め息を付いた。

「お前達、もうこんなことは、やめろ。」

「すべてが原因の貴方達がよくそんな事が言えるわね。」

さよは、バツと身を翻し、優心を連れてどこかへ行ってしまった。

——地上界。

「名乗りも無く、我らの城に堂々と出入りするとは…礼儀知らずの奴が来たことだ。」

真っ白なドレスを身に纏い、堂々とした雰囲気を持つ女性が座っている。

「これはこれは。申し遅れましたねえ。私は、地上界上層部から参りました、桐谷海斗と申しますが…。はじめまして、女帝。」

すでにわかっていたというような顔で、頬杖をつきながら侵入者を見る女帝。

「貴女方を恨む者…と言った方がわかりやすいかなあ。」

「貴様！我が主を侮辱したな！処刑台に連れていくぞ！」

従者達が武器を構える。

「いい。下がりなさい。それにしても懲りないな、お前達も。」

「はい。貴女方が私達をそうさせたんですよ？」

「フン。」

次の瞬間、女帝は、ハッとして、ある異変に気付いた。

「…お前、皇帝に何をした？」

「なんのことですか？ 私にはさっぱり。」

ニヤリと笑う桐谷。

すると…

「皇帝！！なんてことだ！！」

隣の部屋がザワザワし始めた。

「お前、皇帝を殺そうとしたのか？」

それでも、余裕な態度の女帝。

「何も答える必要はないでしょうねえ。」

「で？何をしにここに来た？」

「あゝ…少し様子見ですかね。」

睨み合う二人。

「もうすぐ、終結を迎えようと思ひましてね。この闇に囚われた長い物語りに。それには、犠牲者が必要でしょう？」

「そうか…。お前は何もわかっていない、ただの腰抜けだな。ここから生きて帰れるとは思ふな。」

女帝は、立ち上がった。

「ほお…。ようやくやる気になりましたか。」

「女帝！離れて下さい！我々が始末いたします。」

従者が武器を構える。

「お前達は手を下すな。私がやる。」

すると、手を横に一振りし、女帝は従者達を外に追い出した。

「ククッ…これは面白い。他人は巻き込まない。これは、貴女のポリシーですか？」

「ああ。お前と違って犠牲者は出さない主義だからな。しかし、お前が物語の殺し合いに参加するわけでは無さそうだな。」

「鋭いですねえ。流石は、我ら地上界の上に行く存在とでも言っておきましょうか？」

桐谷の周りは、ゴオッと渦を巻き始める。

「僕は、結構ネチネチした性格でしてねえ。狙った獲物は、蜘蛛の糸のように二度と離さないんですよ。」

「ならば、その糸に捕らわれぬよう、先にお前の息の根を止めるのみだ。」

女帝は、全身から白いオーラを放ち、鋭い剣を桐谷に向ける。

「止めてください！」

「おや？」

そこには、なぜか血だらけの天空が立っていた。

「桐谷っ……！貴方は、一体何を考えているんだ！恥知らずにも程があるぞ！」

「おやゝ天空君じゃないかあ。その言葉、そのまま君に返すよ。君は、もう月騎士ではない、ただの地上人。僕らの仲裁には入れない存在だからねえ。」

桐谷は、冷めた目で天空を見た。

「フン……お前は、藤真家の者だな。今すぐここを立ち去れ。」

女帝は、弱っている天空に近付く。

「危ない！」

天空が叫んだ瞬間、無数の黒い剣が飛んできた。

しかし、それを庇うように天空が女帝の前に動いた。

「おっと！」

女帝は、自分を庇おうとしてくれた天空を突飛ばし、自らの結界で剣を弾いた。

ガキン

「そんな物騒な物を持ち込むではない。余計な犠牲者を出すではないか。」

ドンドン！

「女帝！ここを開けてください！」

剣を弾く音が気になり、従者が必死にドアを叩く。

「お次は、この城を破壊して見せましょうか？」

バキッ！バリバリ

桐谷は、全身の力で部屋を破壊していく。

「無駄だ。この城は、心が汚れている者には壊せない。そういう仕組みだからな。」

「ほお…良いことを聞いた。来た甲斐がありましたねえ。僕は、自ら手を下す性格ではないので、これでやめときますか。」

女帝に向かって様々な物が飛んでくるが、結界で守られているため動じない。

桐谷の目は、憎しみで溢れていた。

「お前の一族が私を見る目は、昔と変わらないな。」

女帝は一瞬、悲しそうな顔をした。

「貴方は、僕からしてみれば、悪人だ。」

そう言って桐谷は、黒い渦を巻き、去ろうとする。

「おい、この男も連れて帰れ。」

天空は、ほぼ瀕死の状態だった。

「嫌ですよ、月騎士ではないその男に、興味もありませんから。」

ガンッ

「女帝！ご無事ですか！？」

無理矢理扉を開け、従者がぞろぞろと入ってくる。

「逃げるのか？」

「逆に、捕まえていいんですか？さっきは、生きて帰らせないと言ったのに。」

そう、黒い渦の中からはつきりと聞こえた。

「桐谷海斗！逃げても無駄だぞ！」

従者達は、一斉に銃を構える。

「逃げてても良い。気が変わった。」

「さようなら、また会いましょう。貴女方の命の行方は、僕が決めることではない。他の誰かですよ。その時、初めて絶望を味わうことでしょうか。」

従者がパンツと撃った瞬間、黒い渦は消えてしまった。

「クソ！桐谷を追え！」

「待て。今はいい。顔も名も知ってしまった奴だ。どうせそのうち捕まる。」

女帝は、従者達を止めた。

「しかしっ…！」

「最優先すべきは、この男の手当てと、そこに突っ立って傍観している皇帝に話を聞くことだろうな。」

先程、血だらけで倒れている皇帝が何事も無かったような顔で様子

を見ていた。

「はっ。」

訳が分からぬ従者達は、命令通り天空を医務室へと運ぶ。

「何をしていた…？皇帝。」

「話しは、長くなる。」

皇帝に複雑な表情をしていた。

その頃、美月は、不思議な夢を見ていた。

「私達の子供を返せ！！」

「やめろ！やめろ！」

たくさんの人、炎が地上界を包む。

「熱い！熱いよ！」

憎しみ、恨み、悲しみ、怒りが沸き上がる。

炎の中、女性と男性が涙を流していた。

すると、一人の男性が二人を包んだ。

「ふっ…くっ」

目が覚めた美月は、涙を流していた。

「あれ…？」

部屋を見渡してみる。なんだか胸騒ぎがして、優心の様子を見ようとした。

ガチャ

「優心さん…?」

部屋にも、リビングにも優心の姿は無かった。

「夜中に外出したのかしら…。」

——そうだ！あのノートに！

美月は、急いで人生基準ノートを開いた。

すると、ジワジワと字が刻まれる。

「何…?どうなってるの?」

天羽優心、風舞美月を殺そうとするが、失敗に終わる。

「殺す…?」

邪魔者が入る。天羽優心は、小夜さよにより、連れ去られる。

「小夜さよ……って先生？」

——あたしの担任は、小夜さよ……。

「凄いでしょ？この力。」

突然の声に振り返る美月。

「……桐谷様っ！」

「やつ！美月ちゃん。」

「これは、どういうことです？」

「人生基準ノートのこと？それは、僕が書いたんだよ。」

「そんなこと……ルール違反です！彼女は、あたしの担当です。」

「僕の命令に逆らうのお？駄目だよ、美月ちゃん。」

「命令…?」

「君は、すっかり忘れてしまったんだねえ。周りのクズみたいな大人に騙されて…。」

ククツと桐谷は笑う。

「何を忘れたっていうの?」

「君が小さい頃から、心に刻み付けておいた僕らの心だよ。君と僕は同じなんだ。」

「やめて!輝瞳をどうしたの?貴方の仕業でしょう?」

「君が殺したんじゃないかあ?もし、僕の仕業だと言っなら、君の仕業でもあるよ。」

「一緒にしないで!あたしが傷付けたんじゃない!」

「でも、一瞬殺意が芽生えたでしょ?憎い憎いって何度も言っ

たじゃないかあ。」

「違うわ!」

明らかに動揺している美月。

「君、勘違いしてないかなあ? 憎しみの心は、悪だと思ってる。」

「そうよ…当たり前じゃない。」

桐谷は、急に無表情な顔つきになった。

「どうしてそう言いきれるの? 事情も知らないくせに。だから僕、信用しきれないんだよね。」

「信用…?」

「善に生きてる人。優しい心って言うのは、本当に存在するのかなあって時々思う。」

——この男は、間違ってる。

「どうして、否定するの？君は、小さい頃から僕らを否定してきたよね。もし、優しい心を持っているって言い張るなら、証明してみせてよ。」

美月は、少し考えて決断を下した。

「わかったわ…。どうすればいいの？」

桐谷をまだ綺麗な瞳で見つめた。

邪悪な気配

——人間界。

優心と、さよは歌番組のステージの舞台裏にいた。

「ねえ…優心。私って嫌な女かしら？」

「なに、いきなり。」

「だって貴女が一番逢いたがってた人を遠ざけてしまったから。」

「そうだね。もう少し、様子を見てみたかったけど。」

優心は、チラッとさよを見て、複雑そうな顔をした。

「貴女が壊れてしまいそうだったから。また昔と同じようになるのは、ごめんよ。」

「優心ちゃん、そろそろ出番です。」

「はい！さよ、隠れて。」

「わかってるわよ。」

そう言って、さよは一瞬で姿を消した。

スポットライトを浴び、大きなファンの歓声が響き渡る。

——久しぶりのステージだ。嬉しい。

優心は、天使のような歌声と言われている自慢の声で歌う。

——みんなが私を見てる。病気なんてしなければ、もっと楽しかったはず。

不意に観客を見ると、自分を見ている美月がいた。

——え！？どうして。

優心は、歌いながら少し動揺していた。

——あの女……どうしてここに……。とにかく……今はちゃんと歌わなくちゃ。

——廊下。

「小夜さよ先生。」

黒髪の綺麗な彼女に近付く美月。

さよは振り向くが、美月を見る目は冷めきっていた。

「なんの用かしら？風舞さん。」

「……貴女の秘密を知ってしまったの。あたし。」

ニヤリと笑いさよを見る美月。

「秘密……？貴女、」

「さっちゃん。監視ご苦労様っ！」

「桐谷っ…。」

桐谷と美月は、さよを見て笑っているだけだった。

「どういうことかしら？」

「彼女にね、僕達の秘密を教えたんですよ。」

「そんな作戦聞いてないわ。」

さよは、戸惑いを隠せなかった。

「ごめんね〜。成り行きでそうなっちゃってさ。それで、仲間のさっちゃんにも、一応伝えようと思って！」

「何をよ。」

「今日、いや…今から、風舞美月は、僕ら地上界上層部の仲間にな

ります！」

パチパチと一人だけ愉快に拍手をする桐谷。

「ということで、どうぞよろしく願いますね、先生。」

美月は、前とは違う暗い表情で言った。

「ふん。この女が、演技をしているという可能性は？」

疑いの目を、美月に向ける。

「先生、そんなに警戒しないで下さい。あたしは、すべてを知って、桐谷様に付くことにしたのですから。」

美月は、本当に以前の美月とは異なっていた。

——やっと…私達の側についたってことかしら？いや…試してみるべきよね。

「それじゃあ風舞さん、今から頼むことやってくれないかしら？仲

間の頼みとして。」

歌番組の出番が終了した頃……

「お疲れ様です、天羽さん！」

「あつ… お疲れ様です。」

スタッフの人に声をかけられたが、先程の美月のことが気になって仕方がなかった。

楽屋に入り、溜め息をつく。

「はー。さよ！もう出番終わったから出てきていいわよ。」

「さよ？」

何度呼び掛けても返事がない。

「さよはね、今はいないの。代わりにあたしが来たわ優心さん。」

バツと後ろを振り返ると、いつの間にか美月が立っていた。

「な…なんで貴女がここにっ…！」

「いけないかしら？あたしが貴女の側にいることが。許してくれたじゃない。少しの間、一緒にいてもいいって。」

ジリジリと優心を追いつめる。

「来ないで！そんなの嘘だよ。貴女を見ると、許せないほどの怒りが込み上げてくるの！」

他人にもその怒りが向いてしまいそうで…！」

ポケットに忍ばせていたナイフを美月に向ける。

「そうなの？でもそう言う気持ち、よくわかるわ。だって、あたしにもそういう気持ちあるもの。それでいいのよ。」

「え？」

「他人にも怒りを向ければいいのよ。あたしを殺すことは困難だしね。」

美月は、フッと笑った。

「今なら殺せる。」

震えながらナイフを持つ優心には、少しの迷いが見えた。

「殺すなんて。あたしは、貴女と同じ感情を持っているのに？あたしは貴女の仲間じゃない。」

「ち、違う！お前は最低の女だ！」

優心は、声が徐々に変化していく。

「ま、いいわ。最後に一つ、確認したいんだけどいいかしら？」

優心は黒いオーラを放ち、美月を睨む。

「貴女は、悪の道に進みたいのよね？」

「悪の他に何かがある。」

「反対の善の道よ。」

「善…？くだらない。人に優しくするのも、労るのも私らしくもない。元々持っていないのに、持つてるフリをするなんて疲れる。」

美月は、無表情のまま優心の言葉を聞く。

「だからあたしは…悪の道に進むしかないの。」

優心の意思を聞いて、ニヤリとする美月。

「ふふ。では、そのように動かせてもらっわ。」

黒い渦を巻いて、姿を消す美月。

誰もいなくなつた部屋に、ペタンと座り込んだ。

「何よあれ。」

優心は目を瞑り、考え込んだ。

「確認したのね、一応、月騎士だから？」

高い塔の上に美月とさよがいた。

「そうよ。あたしは、母や父のような身勝手なやり方はしないわ。運命は、自分の手で切り開くものだから。」

美月の言葉を興味深そうに聞くさよ。

「貴女は、両親が間違ったやり方をしたと？」

「そうよ。それに…桐谷様に言われて気付いたの。月騎士も完璧な人ではないのに、人間の運命を操作していいのかって。」

「ふうん…。」

「やっぱり本人の元々持っている感情を表に出せる運命を作り出すべきだと思ったわ。そうすれば、本人の意思通りの満足いく人生が送れる。」

暗闇を写す美月を見て、微笑むさよ。

——以前は、輝く瞳を持っていたこの女が嫌で仕方がなかった。

「そうよ。貴女の両親は、自分本意で運命を作り出していたもの。人間の意思を違う方向に持つていくなんて、何度可哀想だと思ったことか…。」

「ええ。天羽優心は、悪の道に進ませるわ。」

「貴女…本当に変わったわ、内側も。」

「そう？じゃあ、行かなくちゃ。さっそく、運命を作らなければ。」

美月は、フツツと笑いながら去っていった。

「桐谷：どうやってあの子を変えたの？」

ブワツと宙に浮いている桐谷に声を掛けた。

「僕らの悲しい過去を伝えただけだよ。」

「こんなに簡単なら、あの子が小さい頃から悪を植え付ける必要は無かったんじゃないかしら？」

「もー！さーちゃんったら。あの子には、今までの積み重ねが必要だったんだよ。苦労したねえ、頑固な所が風舞夫妻にそっくりで。」

「私達の過去と、他に何か言っただでしょうか？」

「ああ。藤真天空のことを言った！」

ハハツと笑う桐谷は、楽しそうだった。

「なるほどねえ。」

「ところで…さーちゃん。」

「なに…」

ガッ！

宙に浮いていた桐谷は、突然さよの首を締めた。

「僕の命令以外のことをやったでしょ？」

苦しくて、息が出来ないため声が発せられない。

「美月を殺そうとしたね？優心を使って。駄目だよお仕置きだ。」

桐谷の笑う姿を見た後、さよは意識を失った。

「駄目だよ。あの子は、最終兵器なんだから傷付けてはいけないんだあ。」

背後からサッと桐谷の従者が現れる。

「リーダー。この女、どういたしましょう？」

「うん。まだ使えるから、始末しなくても大丈夫だよ。」

従者は、さよを抱え、去っていった。

「見ているよ。もうすぐでお仕舞いだ。」

——地上界上層部。

「誰だ！お前っ！」

連れ去られていた輝瞳は、男を威嚇していた。

「落ち着けて坊主。俺はなあ…龍神剣。お前さんの元月騎士だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329y/>

美しい月の夜に…。

2012年1月7日13時45分発行